

## 豊田珍彦『豊橋地方空襲日誌』を読む(10)

阿部 聖

### Introduction of the Diary of Air-raid in Toyohashi Area during the Pacific War Written by Uzuhiko Toyota, Part 10 Sei Abe

**要約:** 本項では、『豊橋地方空襲日誌』(第五冊)の1945年5月1日から5月14日までを読み進め、その後、『豊橋地方空襲略日誌』(第六冊)のうち豊橋地域に空襲があった5月14日、5月17日、5月19日、そして一夜にして市の大半が灰塵に帰した6月20日の豊橋空襲について検討する。第五冊の最後になる5月14日の日誌には「戦局の前途を思へば、そんなことも或は無駄であるかも知れず、それに用箋が今は無くなつてどうしやうもない処から、この日誌もこれを以て打切る」として日誌形式の記録はここで終了した。しかし、敵機来襲についての簡単な記録は、6月20日まで続けられた。それが『略日誌』である。

この時期、米軍は激戦が続く沖縄支援のため西日本各地の飛行場の爆撃や船舶輸送遮断のための機雷投下を展開した。5月14日からは名古屋を皮切りに再び大都市焼夷空襲を行い、6月15日に終了した。そして、6月17日から対日爆撃の最終的段階として中小都市の空襲を開始した。豊橋は、6月20日に第2回中小都市空襲で静岡、福岡とともに焼夷爆撃を受けた。こうして日誌の筆者は、6月22日には「この空襲日記を続けるのも無駄だ。我が市の全滅を期会に筆を擱くことになるのである。

なお、本稿の最後に従来から論議のあった豊橋空襲の爆撃開始時刻について筆者の考えを補論として追加した。

**キーワード:** 沖縄戦、大都市空襲、中小都市空襲、6月20日豊橋空襲、爆撃開始時刻

<前号からつづく>

[解説] 前号につづいて日誌を読み進めていく。

季節は新緑の5月となった。3月27日から始まった機雷投下作戦は引き続き行われた。また4月以降も、航空機工場や3月の焼夷電撃戦を受けたさらなる大都市の爆撃も行われ、4月13~14日東京、4月15~16日東京南部・川崎を焼夷空襲した。特攻隊の基地となっていた西日本地域の飛行場に対する沖縄支援爆撃は、4月8

日から1カ月以上にわたって行われ、5月11日に漸く終了する。5月14日から6月15日には、最終的な大都市空襲が名古屋をかわきりに展開され、これらの大都市はほぼ完全に灰塵に帰した。これを受けて、6月17日からは中小都市焼夷空襲が展開された。6月20日には第2回中小都市空襲の一環として豊橋も焼夷爆撃の対象となった<sup>1)</sup>。

以下では、『豊橋地方空襲日誌』(第五冊)の最後の記述となる5月14日まで読み進め、『豊

1) こうした空襲の段階的な捉え方については、工藤洋三(2015)『日本の都市を焼き尽くせ! -都市空襲はどう計画され、どう実行されたか-』およびMark Lardas(2019), "Japan1944-45: LeMay's B-29 strategic bombing campaign" 等参照。

『橋地方空襲略日誌』（第六冊）のうち、豊橋地域が爆撃された5月17日、5月19日および6月20日の豊橋空襲について記述して、それを以って本稿もまた終了としたい。5月1日の日誌から見ていく。

五月一日

(183) 若葉の春が来た。眼に映るもの皆青い新春ながら、日々敵機を頭上に迎えてそれ処の騒ぎではない。

けふは、朝からの曇りだつた。それが小雨となつた十一時半、またぞろ警戒警報が鳴り出した。敵やいづこと情報をきくと、一機は志摩半島にあつて南進し、一機は浜松南方を北進中だといふ。こやつ三十八分頃、浜松附近に到達、北進中ときく。昨日に懲りて誰も彼も緊張する。しかし、こちらにくる模様はなく、鳳来寺山附近を経て飯田方面へ侵入していった。その頃、更に一機が御前崎南方を北進中で、十二時には浜松附近に到達、こやつも前者の後を追ふて北上、秋葉山から木曾福島方面へ侵入していったので、〇時二十五分、警戒警報の解除を見るに到つたが、物情騒然とは蓋しこの頃の情勢を形容するによい言葉だどつくづく思ふ。

(184) 小雨ふる夜の九時半、けたたましく鳴り出した警戒警報のサイレンに夢破られて飛び起きる。途切れ途切れの情報は、はつきりしないが何でも敵一機が志摩半島方面から侵入し、途中、東に向をかへ、渥美半島へやつてきたらしい。南よりの空に例の二九らしい爆音が聞へると、あちらこちらで敵機襲来が叫ばれる。そんなことに頓着ない敵機は、やがて東南浜名湖方面へいつて仕舞つた。かくて僅か廿五分で、九時五十五分、この警報は解除になつた。

[解説] 5月に入っても「日々敵機を頭上に迎へ」るのは相変わらずであった。5月1日は小雨のなか11時30分に警戒警報が発令された。「一機は志摩半島にあつて南進し、一機は浜松南方を北進中」であったが、飯田方面へ侵入して行った。「更に一機が御前崎南方を北進中で十二時

には浜松附近に到達」したが、木曾福島方面へ去つた。

この日は、21時30分にも警戒警報が発令された。「一機が志摩半島方面から侵入し、途中、東に向をかへ、渥美半島へやつてきたらしい」が、やがて浜名湖方面へ去つた。

米軍資料（「作戦要約」）によれば、5月1日に日本に來襲したと考えられるのは、気象観測爆撃機、WSM423~425の3機と写真偵察機、3PRM182~183の2機、計5機である。日誌の11時30分の警報は目的地からみてWSM425（中島飛行機製作所）と3PRM183（浜松、東京工廠、立川）あたりであろうか（第45表参照）。ここで改めて表の説明をすると、この時期の「作戦要約」には、出撃時刻や帰還時刻が記載されていないケースが多くなる。出撃時刻だけが記載されている場合は、出撃時刻を日本時刻に直して、それに7時間をプラスして日本到着予想時刻（この場合は時刻を〔 〕内に入れている）を決めている。帰還時刻だけが記載されている場合は、マリアナ基地と日本本土の平均的往復時間14時間を引いて、出撃時刻（この場合も時刻を〔 〕内に入れている）を割り出している。1時間から2時間の誤差はあると思われるが、おおよその日本到着予想時刻を推定することができる。

なお、『朝日新聞』（1945年9月2日付）は、九州方面への少数機侵入を伝えるのみであった。こちらはこの時期になると少数機に関する記事はきわめて少くなる。

五月二日

(185) 正午に今十分といふとき、折柄そばふる小雨の中を警戒警報のサイレンが鳴り出した。ゆふべからの降りつぎで屋外にある壕といふ壕は、悉く水浸しで待避しやうにも仕方がない。宅のも前の荷物用地窖は水浸しで、収容品は昨日のうちにとり出してあるが、西の待避用は、雨漏りこそすれ水溜りになるやうなことはないので、イザとなれば飛び込む許りだ。が、敵機の動静如何にて、先づ情報を聞くと熊野灘から侵入した敵一機、奈良、滋賀両

第45表：1945年5月1日～7日の日本に襲撃した気候観測爆撃任務・写真偵察任務等

月日	作戦	目標（地域）	出撃時刻	出撃時刻 （日本時間）	到着予想時刻 （日本時間）	帰還時刻
5月1日	WSM423	佐伯飛行場	[302335K]	[302235]	[010935]	G011335K
	WSM424	佐伯	010800K	010700	011400	G012005K
	WSM425	中島飛行機製作所	010558K	010458	011158	G011949K
	3PRM183	浜松, 東京工廠, 立川	010605K	010505	011205	G011948K
	3PRM184	九州の飛行場	010607K	010507	011207	G012148K
5月2日	WSM426	宮崎飛行場	012254K	012154	020454	G021342K
	WSM427	枕崎飛行場	[020542K]	[020442]	[021142]	G021942K
	WSM428	名古屋	[020620K]	[020520]	[021220]	G022020K
	NM7					
5月3日	WSM429	佐伯飛行場	030700K	030600	031300	S031450K
	WSM430	濟州島地域	[030616K]	[030516]	[031216]	S032016K
	WSM431	浜松	[030920K]	[030820]	[031520]	S032320K
5月4日	WSM432	呉	032303K	032203	040503	
	WSM433	沼津駅構内	[040607K]	[040507]	[041207]	S042007K
	WSM434	甲府	[040930K]	[040830]	[041507]	S042330K
	3PRM185	九州の飛行場	[040345K]	[040253]	[040953]	G041745K
	3PRM186	東京地域	[04070K]	[040607]	[041307]	G042110K
	3PRM187	九州の飛行場	[040432K]	[040332]	[041032]	G041832K
5月5日	WSM435	広島	042253K	042153	050453	S051320K
	WSM436	濟州島地域	[050630K]	[050530]	[051230]	G052030K
	WSM437	高知	[050737K]	[050637]	[051337]	G052137K
	3PRM189	東京地域	[050525K]	[050425]	[051125]	G051925K
	3PRM191	呉	[050630K]	[050530]	[051230]	G052030K
	WSM438	大分	[060030K]	[052330]	[060630]	G061430K
5月6日	3PRM188	九州～呉	[052235K]	[052135]	[060435]	G061235K
	314RSM8	各務原航空機工場	051816K	051716	060016	G060842K
	WSM439	呉ドック地域	[060840K]	[060740]	[061440]	G062240K
	WSM440	横須賀海軍基地	[060626K]	[060526]	[061226]	G062026K
	3PRM190	東京～浜松地域	[060350K]	[060250]	[060950]	G061750K
	3PRM192	九州の飛行場, 関門海峡, 徳山, 呉	[060635K]	[060535]	[061235]	G062035K
5月7日	WSM441	濟州島地域	062302K	062202	070402	G071319K
	WSM442	東京北部	[070550K]	[070450]	[071150]	G071950K
	WSM443	濟州島地域	070601K	070501	071201	G072207K
	3PRM193	東京地域	[070625K]	[070525]	[071225]	G072025K
	3PRM194	九州, 呉, 関門海峡	[070600K]	[070500]	[071200]	G072000K

(出所)「作戦要約」より作成。

県を経て関ヶ原に出て名古屋に侵入、瀬戸附近より北上し富山湾上空までいつたので二十五分許りでこの警報は解除せられた。

(186) この敵は其後旋回、南下し来り、十二時四十分、下呂附近に達したので再び警戒警報の発令となつたが、こやつ長野愛知県境を東進し静岡県に出て、御前岬附近から東南海上に脱去したので、一時、二度目の警報も解除せられた。雨は相かわらず

降つて居る。

[解説] 5月2日は9時50分に警戒警報のサイレンが鳴った。ところが「ゆふべからの降りつきで屋外にある壕といふ壕は、悉く水浸しで待避しやうにも仕方がない」といった状態であった。家の「前の荷物用地窖は水浸しで収容品は昨日のうちにとり出」さなければならなかった。退避用のもう一つの壕は、いざとなれば飛び込

むことはできたとはいえ、それも敵機の動向次第でということであった。退避壕はすこぶる雨に弱かったのである<sup>2)</sup>。「熊野灘から侵入した敵一機、奈良、滋賀両県を経て関ヶ原に出て名古屋に侵入」したが、その後、北上した。この機は戻ってきたために再び12時40分に警戒警報の発令となったが「長野愛知県境を東進し静岡県に出て御前岬附近から東南海上に脱去した」。米軍資料（「作戦要約」）からみて、WSM428（名古屋）と見られる（第45表参照）。この日についても『朝日新聞』は「B29二機南九州を偵察」と伝えるのみであった。

既に述べたように、米軍は4月中旬以降、沖縄支援のために連日にわたって九州、四国をはじめとする西日本の飛行場を爆撃していた<sup>3)</sup>。5月1日は偵察だけに終わったようであるが、この作戦は5月11日まで続く。

五月三日

(187) 午前九時五十分、折柄の曇り空に警戒警報が鳴りひびく。これより先き、朝来、友軍機の去来に風雲の忙しさを感じしめるものがあり、素破こそと耳を聳てると敵は已に三重県に侵入し、このとき豊橋の南方を東進中だといふ。確か味方か、雲上から聞へる爆音も油断ならぬ。まもなく浜松南方を東進中だとて三重県の解除を見たが、その後また引返し、十時十五分に渥美半島の沖合を旋回してみたが、十時二十分、南方洋上に脱去したとてこの警報は解除された。友軍機は相変わらず西に東に爆音高く飛んで居る。

(188) 午後一時半、またまた警戒警報のサイレンが鳴る。情報によると、突如、敵一機が伊賀上野附近に現れ東北進中だといふ。ここから名古屋までは僅々数分の地点と緊張待機した処、五十五分になってこれは友軍機であることが判明し、早速、警報の解除があつた。空はくもりでその雲の上のことであり、避け得ない間違ひとあれば、あれは致し方もな

い。

(189) 町内会の用務で会長宅に集まり協議を済まして十時散会、帰つて寝ると、まだ半眠りもしない十一時半、夜空にけたたましく警戒警報のサイレンが鳴り出した。また一機か二機でうせ居つたのだらうと、多寡をくくつて情報をきくと、志摩半島をめざし北上してくる敵はすべてで十一目標あり、その先鋒はやがて接岸する距離にあるといふ。久しぶりで敵機め来たかと緊張してまちうける。

まもなく敵機はやつて来た。そして北上すると見せかけ熊野灘へ出て旋回をはじめた。大方、後続機を待ち受ける為だらう。いよいよ大挙して名古屋に来るとすれば、こちらが脱出口となり油断は出来ないと、雨でとり出した家財を地窖へ納めるやら、待避壕へ身の回り品を持ち込むやら。いざという時は病人を抱へてでも待避すべく準備して居ると、敵機は予想に反し名古屋を捨て、専ら坂神地方をめざして侵入し、播磨灘を四国へ出て南方へ次々に脱去しつつあるので、〇時十分、この警報も解除された。折柄二十一夜の月ひょっこり山の端から顔を出した。

[解説] 5月3日は、まず9時50分に警戒警報が発令された。「敵は已に三重県に侵入しこのとき豊橋の南方を東進中」であったが、間もなく浜松南方を東進したものの、引き返して渥美半島の沖合を旋回して去った。2度目の警戒警報は13時30分、しかしこれは友軍機であった。さらに23時30分に3度目の警戒警報が発令された。「志摩半島をめざし北上してくる敵はすべてで十一目標」で、「大挙して名古屋に来るとすれば、こちらが脱出口となり油断は出来ないと雨でとり出した家財を地窖へ納め」るなどした。しかし、敵機は名古屋に向かわずに阪神方向をめざした。米軍資料（「作戦任務報告書 No.139」）によれば、23時30分のB-29の大群は機雷投下作戦のため、関門海峡や瀬戸内海を襲った313航空団の98機であった可能性が高い。

2) 待避壕については本稿、第4回（2015年第5巻第1号）51～53頁、第9回（2021年第9巻第1号）29頁参照。

3) 沖縄支援のための西日本の飛行場爆撃の様子については本稿、第8回（2020年第9巻第1号）38～41頁参照。



また、米軍資料（「作戦任務報告書」）によれば、5月3日には、313航空団により沖縄支援のための九州・四国各地の飛行場の爆撃（作戦任務133～139）が実施された。また少数機で日本に來襲したと考えられるのはWSM429～431の3機であった（第45表参照）が、豊橋の警戒警報はいずれにも該当しない。『朝日新聞』（5月4日付）もまた九州の飛行場爆撃を伝えるのみであった。

なお、『朝日新聞』（5月3日付）は1面トップで、4月30日に自殺を遂げたとされるヒトラーの死がドイツで5月1日に発表されたことを伝えている。日誌がこれに言及するのは5月5日の記述である。

五月五日

(190) 朝町内会の用を済してから、西八町の三宅医師へ婆さんの薬を貰ひにゆく。昨日、百機の侵入を見なかつたので、今日辺り或はやつてくるかも知れぬと、前の山本君を頼んで置いて出掛けた。三宅医師で薬を貰つて門を出たとたん、お隣の市役所のサイレンが鳴り出した。飛び込んで見ると、時は九時十分前、熊野灘を北上する敵の数群あるとの情報だ。

家には寝たなりの病人があるので急いで帰宅すると、合図は山本君の妻君が打てくれたといふので一安心。敵機はと情報を聞くと、殆んど一時間近くも、何の為か熊野灘で旋回をつづけ、陸岸へは接近してこないが、前回と同様、中部軍管区へ侵入するらしい気配濃厚だといふ。

暫くすると、予想通り西北進を始め、坂神を経、四国を通過しては帰つてゆくらしい。外に御前崎附近から侵入した敵一機は、北進して信州に入り、東部軍管内に侵入していった。今日はいくつもの敵機を頭上に迎へる決心で勇躍待機したが、結局、この程度で警報は解除になつた。結構な事だ。

(191) 軍役奉仕者割当てで、会長宅から帰つて寝たのが十時過ぎ、漸く寝付いた十一時半、鳴り出した警戒警報に起されて仕舞つた。眠い眼をこすりこすり情報を聞くと、数十幾つの目標は浜名湖から西へ志

摩半島、潮岬、四国方面まで分散侵入してきたといふ。その内に南方で素晴しく大きな炸裂音が天地を震はして聞へ、すつかり眼が醒めて仕舞つた。敵機近しと鉄兜を被るやら、合図の太鼓をうつやら。そのうちに南東の方から二十九らしい爆音が聞へてきたので待避の合図をうつ。これが初めて其後三度までも爆音が上空に迫り待避の合図を打つたが、幸に投弾もされず午前一時になると、敵機もすつかり南方洋上に脱去したので、警報も解除された。こうして夜も昼も敵機に脅されつつあるといふことは、何たることであらう。思へば口惜しい限りである。その上、五日前の本月一日、ヒトラーの戦死からドイツの屈服となり、今は独力全世界を相手に戦はねばならなくなつた以上、困難は日に日に加重されてゆく許り。大体の者は勝利の確信がぐらつきそうだ。この難関を切りぬけてゆくには並大抵のことではない。もつともつと、更にもつともつと、私共はしつかりせねばならぬと考へる。

[解説] 5月4日の日誌の記述はない。第314航空団による九州・四国地域の飛行場の爆撃（作戦任務140～143）が行われ、WSM432～434の3機、3PRM185～187の3機、計6機が來襲した（第45表参照）が、豊橋地域では警報の対象にならなかつたようである。

5月5日はまず8時50分に警戒警報が発令された。日誌の筆者は病床にある妻の薬を取りに行つての帰り際であった。待避の合図は向いの家の山本氏に依頼して行つたので事なきを得た。敵機は熊野灘を旋回して、その後、阪神、四国を通過して去つた。「御前崎附近から侵入した敵一機は、北進して信州に入り、東部軍管内に侵入」して行つた。

次に警戒警報が発令されたのは、「漸く寝付いた十一時半」のことであった。「数十幾つの目標は浜名湖から西へ志摩半島、潮岬、四国方面まで分散侵入」し、そのうち「南方で素晴しく大きな炸裂音が天地を震はして聞へ」た。「三度までも爆音が上空に迫り待避の合図を打つたが、幸に投弾もされ」ないで終わった。

米軍資料によれば、九州地域の飛行場の爆撃

(作戦任務144~145, 147~149) の他, 第58および第73航空団による広島航空工廠等への爆撃(作戦任務146) や5日から6日かけての第313航空団による東京湾, 伊勢湾, 瀬戸内海に対する機雷投下作戦が実施された。11時30分の警戒警報は, この機雷投下作戦に対するものであろう。『朝日新聞』(5月6日付)は「広島へB29延百機来襲」「B29六十六機九州へ」などと伝えた。

なお, 5月5日に来襲した少数機は, 第45表からWSM435~437の3機と3PRM189, 191の2機, 計5機と考えられるが, 豊橋の警報に対応するものは見当たらない。

こうした状況に加えて, 「五日前の本月一日, ヒットラーの戦死からドイツの屈服となり, 今は独力全世界を相手に戦はねばならなくなった」「勝利の確信がぐらつきそうだ」と本音とも言える心情を記さなければならなかった。

#### 五月七日

(192) 朝から無比の好天気。春日は燦々として地にふりそそぎ, むせかへるやうな青葉のかほり。これが戦ひの世の自然の実相だ。午前八時五十分, この晴朗の天地を震はして警戒警報のサイレンが鳴る。何といふ浅間しい人の世だらう。

情報を聞くと, 志摩半島の南方洋上を北上して来る敵一機があるといふ。五十五分, 敵機は渥美半島に到達し北進中との情報にふと空を見上げると, 市の西空を高高度で本宮山の方に向ふ純白の一機がある。こやつが二十九らしいと何ともいひやうのない敵機なのだ。今日は天気の良い都合で雲も曳かず, 我が神州の天空を人もなげに悠々と飛んでゆく。あんなもの一機位, 何故, 叩き落せないのだらう。侵入は事前に判り, 我にも対抗すべき飛行機がありながら無事に帰すといふことがどれ位我々の血を沸き立たせることか。信頼する軍部よ, もう一奮張り踏張ってくれと叫びたくなるも, 国家を思へばこそだ。この敵機は, やがて北進して鳳来寺山方面から信州に入り, 関東地方へ侵入していつたので, 九時二十五分, あつげなく警報も解除され, 世はまた清朗な自然に還つた。

[解説] 5月6日には豊橋地域に警報は発令されなかったようである。米軍資料(「作戦要約」第45表)によれば, WSM438~440, 3PRM188, 190, 192, 314RSM8の7機の来襲が推測されるが警報の対象にはならなかった。また, 飛行場爆撃や機雷投下等の作戦も実施されなかった。翌7日には, 8時50分に警戒警報のサイレンが鳴った。「志摩半島の南方洋上を北上して来る敵一機」が55分には「渥美半島に到達し北進」し, 「鳳来寺山方面から信州に入り関東地方へ侵入していつた」。

この日の日誌には「侵入は事前に判り, 我にも対抗すべき飛行機がありながら無事に帰す」と記しており, 軍部に対する強い苛立ちが垣間見える気がする。

米軍資料によれば, 5月7日には気象観測爆撃機, WSM441~443の3機, 写真偵察機3PRM193~194の2機, 計5機が来襲したようである(第45表参照)。豊橋地域の警報の対象になったのは, 時間的に少し無理があるかもしれないが, WSM442か3PRM193あたりであろうか。「作戦任務報告書」によれば, 作戦任務151~154において第313航空団が2日ぶりに九州各地の飛行場を爆撃した。『朝日新聞』(5月8日付)は「B29七十機来襲 北九州, 大分, 鹿児島侵入」と伝えた。

#### 五月八日

(193) 大詔奉戴日のけふは朝からの曇り。午前九時五十分, 警戒警報のサイレンがまた鳴り出した。情報によると, 志摩半島をめざし北上して来たB24一機は, 鳥羽附近に達し旋回中だといふ。こやつ北上する気配もないので僅か五分足らずで警報は解除。処が, この敵機は東北に進んで浜松をめざし, 極めて低空で侵入東進を続けたが, まもなく南海海上に脱去したといふ。

侵入一機 B24 現はる

(194) 早目にひるを食し, 柳生運河の海まで出てかまどをとりにつく。会長の好意で特別に配給されたからだ。薪不足のけふこの頃, 何よりの好意と, 去

る六日とりにゆくと日曜でだめ。改めてけふ出掛けると、小暇までゆくと、またまた警戒警報のサイレンが鳴り出した。もう半分路来たこと故、戻りもならずとそのまま足をはやめ、先方までいつて受取り汗を流しながら帰ってきた。約一里ある処を往復一時半でいつてきた訳だ。従て、情報も聞かず敵機の動静も分らず、帰ってきたときは已に警報が解除された後だった。

あとにて聞けば、またまた B24 が一機で志摩半島南方から十時五十分頃侵入、同半島を旋回、鳥羽附近から南方に脱去したが、この外十一時三十分頃から十二時十分頃まで、P51 約六十五機が千葉から帝都に侵入し、また午前六時五十分頃、B29 廿六目標(機数不明)が四国九州地方に襲来し、一方、同十一時頃、潮岬から侵入した B29 一機、三重県南部を経て名古屋に侵入、更に北進して岐阜下呂より富山県南部に出て、金沢を経て関東地区へ侵入していつた。丁度 B24 と同時であり或はこのための警報であつたかも知れぬ。

【解説】5月8日には、9時50分に警戒警報が発令された。この敵機は「志摩半島をめざし北上して来た B24」で、「鳥羽附近に達し旋回」していたが、浜松方面へ進んだ。また、昼ごろ外出中、警戒警報のサイレンが鳴ったため、家路を急いだ。帰宅時にはすでに警報は解除されていた。その後聞いた話として当日の敵機来襲の様子を記述している。この B-24 は硫黄島を出撃したものであろうか。

米軍資料によれば、この日には、WSM442～443の2機、3PRM193～194の2機、計4機が来襲したことになる(第46表参照)。日誌の「十一時頃潮岬から侵入した B29 一機、三重県南部を経て名古屋に侵入」、その後、関東地区へ去ったのは、3PRM193の可能性が高い。

ただ、この日は硫黄島から B-29 に誘導された P-51 が房総半島を襲撃した。『朝日新聞』(5月9日付)は「P51 六十五機来襲 B29 誘導 千葉の基地、工場銃撃」と題して「P51 六十五機は B29 二乃至三機の誘導により八日午前十一時三十五分頃から同じく十二時十分頃に互

り・・・千葉付近の飛行場及び軍需工場に銃撃を加へた」と伝えた。また同紙に、「九州、四国へ B29 連襲」とあるように、作戦任務 155～158 において九州・四国の飛行場の爆撃が行われた。

五月十日

(195) 組の中村新午君の応召で、午前四時半、君を送つて駅にゆき、帰つてうつらうつら居眠りしていると、十一時十分、警戒警報のサイレンが鳴り出した。空は薄く曇り敵機の動静を見るには都合が悪い。情報では敵大型一機が浜名湖南方から浜名湖にかけ低空で旋回中。また別の機が熊野灘新宮附近を東北進中だといふ。

二十五分になると浜名湖附近の敵は南方に脱去したらしいが、別の機が南方洋上を北進中であり、新宮附近にゐた敵は志摩半島を経て浜名湖南方を東進し、南方洋上の敵は志摩半島に向つて居るものやうだといふ。

次の情報では何れもが東北に進み、何れも関東地方へ去つた由で、正午に近くこの警報は解除された。

侵入三機 別々に附近を行動

(196) 前の敵機が去つてやうやう三十分、十二時半またまた警戒警報のサイレンが鳴り出した。情報によると、京都附近を東進する B29 らしい一機があるとのこと。やがて伊吹の上野附近だ、伊勢湾の中部だといつてゐるまに岡崎の附近にきた。さては来るなど西空を注視してゐると、微かに例の爆音が聞へる。ソラこそ来たぞと緊張するとまもなく爆音は風に消えて仕舞ふ。

こうして実は岡崎から豊橋にかけて旋回してゐたが、やがて西の上空に例の真白い姿を現し南進するのが見へると、高射砲を打ち出したが中々命中しない。今度は南方で反転したと見ると真上をさしてやつてきた。いかにも投弾しさうな姿勢なので、病人を起こし壕の入口まで行くと、もう敵は東方に通過したので危険はないと、また臥床に戻す。やがて敵は浜松に侵入し投弾したと見え、二回三回恐ろしい炸裂音が伝はつて来た。敵は尚東進をつづけ、御前崎附近から南方洋上に脱去したといふ。かくて本管

第46表：1945年5月8日～14日の日本に襲撃した気候観測爆撃任務・写真偵察任務等

月日	作戦	目標（地域）	出撃時刻	出撃時刻 （日本時間）	到着予想時刻 （日本時間）	帰還時刻
5月8日	WSM442	東京北部	[070550K]	[070450]	[071250]	G071950K
	WSM443	濟州島地域	070601K	070501	071201	G072207K
	WSM444	八幡	072324K	072224	080424	G081545K
	3PRM193	東京地域	[070625K]	[070525]	[071225]	G072025K
	3PRM194	九州、呉、関門海峡	[070600K]	[070500]	[071200]	G072000K
5月9日	WSM445	名古屋	[080554K]	[080454]	[081154]	G081954K
	WSM446	濟州島地域	[080809K]	[080709]	[091409]	G082209K
	WSM447	対馬海峡	082328K	082228	090428	G091333K
	WSM448	濟州島地域	[091755K]	[091655]	[092355]	G092013K
	314RSM9	川西航空機工場	081751K	081651	082351	G090755K
	3PRM195	浜松—立川				
5月10日	WSM449	呉				
	WSM450	九州	092308K	092208	100408	
	WSM451	東京				
	WSM452	広島	100613K	100513	101213	S101930K
	WSM453	濟州島地域				
	3PRM197	東京地域	100604K	100504	101204	G101847K
	3PRM198	大阪、浜松地域	100555K	100455	101155	G101815K
	3PRM199	九州地域	100558K	100458	101158	G102015K
	314RSM10	中島飛行機製作所	101851K	101751	110051	
5月11日	WSM454	八幡	[110846K]	[110746]	[111446]	G112246K
	WSM455	広島	[110720K]	[110620]	[111320]	S112120K
	3PRM196	郡山—仙台	[110415K]	[110315]	[111015]	G111815K
	3PRM200	立川、東京、浦賀湾	[110340K]	[110240]	[110940]	G111740K
	3PRM201	東京地域	[110125K]	[110025]	[110725]	G111525K
	3PRM202	神戸、大阪、名古屋地域	[110355K]	[110255]	[110755]	G111755K
	3PRM203	九州の飛行場、徳山	[110130K]	[110030]	[110730]	G111630K
	3PRM204	宮崎飛行場、関門海峡	[102317K]	[102217]	[110417]	G110317K
	3PRM205	徳山、呉地域	[110242K]	[110142]	[110842]	G111642K
5月12日 5月14日	WSM456	濟州島地域	112305K	112205	120405	
	WSM457	東京				
	WSM458	神戸ドック地域				
	WSM459	呉				
	3PRM206	九州の飛行場他				
	WSM460	東京				
	WSM461	対馬海峡地域				
	WSM462	神戸				
	3PRM207	九州地域				
	3PRM209	名古屋、大阪地域				

(出所)「作戦要約」より作成。

内に敵機なく、午後一時三十分、二度目の警報も解除された。

[解説] 5月9日は日誌の記述はない。米軍資料によれば、この日、WSM444～445、3PRM195の計3機が襲撃したようであるが(第46表参照)、警報の対象にならなかったようである。

5月10日にはまず11時10分に警戒警報のサイ

レンが鳴った。「敵大型一機が浜名湖南方から浜名湖にかけ低空で旋回中。また別の機が熊野灘新宮附近を東北進中」であったが、いずれも関東地方に去った。12時30分、再び警戒警報が発令された。「京都附近を東進するB29らしい一機」は「実は岡崎から豊橋にかけて旋回し」ていた。「高射砲を打ち出したが中々命中しない」。まもなく「真上をさしてやつてき」



て投弾しそうな気配に、病床にある妻を待避壕の入り口まで同伴した。日誌は「敵は浜松に侵入し投弾したと見え二回三回恐ろしい炸裂音が伝はつて来た」と伝えているが、『豊西村空襲記録』には「名古屋方面ヨリ豊橋、浜松東北方ニテセンカイ秋葉山上ヨリ浜名湖南方海上脱去、高射砲発砲セリ」とあるので、実は高射砲の発射音で投弾はなかったようである。

この日には、第313航空団による九州地域の飛行場爆撃（作戦任務159～162）や第73、313、58航空団による瀬戸内地域の第3海軍燃料廠・呉海軍工廠、徳山石炭集積場、岩国陸軍燃料廠、興亜石油麻里布製油所、大浦貯油所などの爆撃が実施（作戦任務163～166）された。また、第46表によれば、WSM449～452の4機と3PRM197～199の3機、計7機が来襲したと考えられる。豊橋地域の警戒警報はこのうちのWSM451、3PRM197～198のいずれかの可能性が高い。

五月十一日

(197) 敵は、昨日、二百余機で西日本を荒らしたに不拘、けふまた相当大編隊で坂神地方に来襲した。即ち、このため午前十時、警戒警報の発令を見たのであるが、情報によると敵主力は今坂神地方を攻撃中で、別の一機が天津附近を東進中だといふ。時移るに従ひ、敵の大編隊は予想の如く次々に志摩半島に出ては南方洋上へ脱去してゆくが、先にいつた一機がいつのまにかこちらにやつて来たらしい。折々雲の間から例の爆音が聞へるが、その実体を捉へることは出来ぬ。次の情報で敵一機が豊橋附近を旋回中だといふ。こやつ投弾した模様もなく浜名湖南方へ出て東進しつつあるので十時四十分になつてこの警戒警報も解除になり平常に復した。

[解説] 「けふまた相当大編隊で坂神地方に来襲し」、10時に警戒警報が発令された。そのうち「敵一機が豊橋附近を旋回中」という情報だったが、浜名湖南方へ去った。米軍資料（「作戦任務報告書」）によれば、この日、作戦任務167～172の作戦が行われた。また、日誌で「大編

隊で坂神地方に来襲した」とあるのは、第58、73、314航空団の計102機による作戦任務172の神戸の川西航空機工場の爆撃部隊であった。この作戦以外には、第313航空団により九州各地の飛行場に対する爆撃が行われた。

『朝日新聞』（9月12日付）は、これらの様子を「阪神にB29六十機」「九州四国へも連襲」「関東東北へB29四機」「東海地区にも行動」といった見出しで報じている。東海地区については「午前十時頃 B29二機は遠州灘から侵入、一機は豊橋附近を旋回偵察の後投弾することなく脱去」と報じているので、日誌が神戸を爆撃した「一機がいつのまにかこちらにやつて来たらしい」としているものの、別に遠州灘から侵入した2機のうちの1機とも見ることができる。2機とも関東地区に進んだと見られる。

第46表によれば、5月11日には少数機の来襲は、レーダースコープ写真撮影機314RSM10、気象観測爆撃機WSM454～455、写真偵察3PRM196、200～205、計8機であった。遠州灘から侵入する可能性があるのは、警報時刻からも考えて3PRM200（立川・東京・浦賀湾）であろうか。

五月十二日

(198) 正午に今十分といふとき、警戒警報のサイレンがまた鳴り出した。先刻畿内地方に侵入した敵一機が近江八幡附近を東北進中だといふ。こやつ関ヶ原、岐阜を通つて名古屋にくるかに見へたが瀬戸へ出て北進、高山から北陸へ侵入していつた。これが一番機で、二番機は潮岬附近を旋回してゐたが、侵入することなくそのまま脱去した。これがあらぬか十二時二十分頃、御前岬南方に敵一機が現れ、北上して静岡を侵して東進、関東地区に侵入していつた。そんな訳で十二時四十分、この警報もあつさり解除された。

[解説] 5月12日は、11時50分に警戒警報が発令された。「先刻畿内地方に侵入した敵一機が近江八幡附近を東北進中」とのことで名古屋に向かうと思われたが、北陸へ侵入していつた。こ

れ以外に潮岬南方の一機はそのまま脱去、御前岬南方の一機は関東地区へ去った。

この日、大規模爆撃部隊の爆撃は計画されなかった。少数機の来襲については、これまで「作戦要約」の出撃時刻または帰還時刻から、日本への来襲予想時刻を推定していたが、この日以降、出撃時刻、帰還時刻の何れも記載されなくなった。このため日本来襲予想時刻の推定が不可能になった。そのため出撃時刻（K時すなわちマリアナ時および日本時とも）、日本への到着予想時刻は、何れも空白とせざるを得なかった（第46表参照）。

『朝日新聞』（5月13日付）は「B29神戸に投弾」と題して「十二日午前十一時すぎ紀伊半島南端から侵入したB29一機」は最終的に神戸に投弾して脱去、「B29一機十二日午後〇時二十分御前崎から侵入」と報じた。また「九州を偵察」との見出しで「午前八時豊後水道より侵入」「他の一機は正午頃志布志湾より侵入」と報じた。神戸を爆撃したのはWSM458（神戸ドック地域）かと考えられる。

#### 五月十三日

(199) 朝からのよい天気には葉桜のかけがみどりにかほる正午、B24がやつて来て浜松南方海上を旋回しつつあり、静岡県に警戒警報が発せられ、豊橋地方も注意せよといふ。こやつ非常に低空で旋回してみたが、やがて東に移り天龍河口、御前岬と進んでゆく。その頃、別に大型一機が熊野灘に現れ、尾鷲附近を旋回してゐるので三重県にも警戒警報の発令となつた。こやつ東進の算、大なりで、やがて本県にも警報の発令を見るだらうと待ち構へる。果して、こやつ志摩半島に出て海岸線に沿ひ東進中だとて、〇時二十分前、警報の発令となつた。

このころ敵は伊勢湾をこへ、渥美半島沖へやつて来て超低空を旋回してみたが、次いで浜名湖、天竜川口と移り旋回をつづけたが、一時になると南方洋上に脱去しつつあるので漸く警戒警報の解除となつ

た。

〔解説〕 5月13日の正午に警戒警報が発令された。これは浜松南方を旋回するB-24に対するものであった。これとは別に熊野灘に現れた大型機一機が東進して、「〇時二十分前警報の発令となつた」。この機は渥美半島へやってきて低空で旋回していたが、さらに東進して去った。

『朝日新聞』（5月14日付）は「十三日十二時頃紀伊半島より超低空で侵入したB24らしき一機は沿岸沿ひに東北進し三重県下に投弾の後東海軍管区に入った」と報じている。また、これより大きな見出しで「九州洋上に機動部隊近接す 艦上九百機我基地を銃爆撃」などと報じた。実は、5月11日、沖縄支援に参加していた米第58任務部隊の旗艦、空母バンカーヒルが特攻機の攻撃を受けて大きな打撃を受けた。このため同部隊は、旗艦を空母エンタープライズに変更して、九州の飛行場を攻撃するために北上した<sup>4)</sup>。こうして12日にはエンタープライズの夜間戦闘機部隊による攻撃がはじまり、13日には第58.3任務群（空母エセックス、モンレーなど）および第58.1任務群（空母ホーネット、ベニントンなど）の艦載機が、そして、翌14日には第58.1任務群（ベニントン・ホーネットなど）の艦載機が、九州の飛行場などを昼夜兼行の銃爆撃を行なった<sup>5)</sup>。なお、13日から14日にかけて第313航空団により関門海峡を目標にして機雷投下作戦も行われた（作戦任務175）。

日誌の著者は、こうした情報については新聞で断片的に知るのみで、この間、豊橋地域に爆撃はなかったとはいえ、日本軍の劣勢は誰の目にも明らかで、日誌を続ける気力も限界に来ていたと見ることができる。

#### 五月十四日

(200) 朝、大らかな日の出を拝してまもない午前六時過ぎ、突如、警戒警報のサイレンが鳴り出した。

4) 工藤洋三（2018）『アメリカ海軍艦載機の日本空襲－1945年2月の東京空襲から連合軍捕虜の解放まで』81頁。

5) 同上、81～95頁参照。

朝の早い我家では已に朝食はすんでゐたが、まだ支度中の家が多かつた。

情報によると、志摩半島の東南方を北上する敵の目標があるといふ。近頃、空襲も至つて低調なので、又かと許り、多寡をくくつてゐると、六時四十分頃、それが四目標となり御前岬南方を北進する一目標の外、八丈島附近に後続の数目標があるといふ。今日は坂神へ行くか関東へ行くかなど虫のいいことを考へてゐると、六時五十分、敵の二目標は志摩半島南岸に到達し旋回集結中で、七時五分にはこれが六目標となり、海上に後続機が五目標あるが、和歌山県御坊附近に別に九目標があり旋回中だから、志摩半島へ到達したやつらは名古屋へ向ふだらうという。さうすれば帰路を我が豊橋市の上空にとるは必然と緊張して待機に入る。

七時五十分、いよいよ愛知県にも空襲警報が発令された。これは敵めが旋回集結を終り、名古屋をめざし北進に移つたからだ。八時五分、敵の第一波二十数機が名古屋に侵入した。こやつらは東進、岡崎を経て程なく我が郷土の空にやつてきた。然し、けふは西半天が曇りで敵機の動静を認めることが出来ない。ただ、情報を耳にたよる許りだ。それも爆音が次々頭上に迫るので寝てゐる病人を無理に待避壕に入らせる。こうして壕中に敵機の爆音と高射砲の炸裂音と、更に味方機の邀撃であらう機関砲のバリバリいふ音を聞くこと十数回。けふは、敵は爆弾を投下せず、専ら焼夷弾ばかりを投下し、名古屋の一部及豊橋市にも火災が発生したが、大したことはないといふ。出て見ると、西の方に当つて煙らしいものが立昇る程度で、成程、大したことはないやうだ。その頃、天の一部に晴れ間が見へ出した。ここを通過する敵機がよく見へる。それに、けふの敵は例の高高度をとらずに雲の下を行くので、はつきりその巨体が見へる。大体九機から十一、二機で西空を南に進んでゆくのが幾組といふ程続く。中に二組三組頭上北よりを通つてゆくやつがある。高射砲が打上げられるが中々当たらない。当てる為にうつのでなく、追払ふために打つやうにも見へる。こうして幾十組といふ敵機を送つて、九時四十二分、漸く敵機の影を絶つたので、空襲警報が解除になり、十分遅れて警戒警報も解除になつて、漸く平常に帰つ

た。

#### 来襲四百数十機

跋として

去年十一月二十三日、マリアナの敵機を迎へて、警報のため市のサイレンが鳴り出したのを第一回として、今日百七十三日の間に丁度二百回に達した。

このざつと半年の間に戦争の様相もすつかり變つて仕舞つた。戦局はいよいよ国家興廢の分岐点に立ち、困難は其度を超え盟邦イタリー先づ敗れ、今またドイツ迄が尻古垂れて仕舞ひ、今は東亜諸国の支援があるにしても、兎に角我国だけで全世界を相手に戦はねばならなくなつた。

かくてその初め、烈々たる闘志を以て必勝を信じ、空襲などはね返す気概を以て戦つて来たものの、日を経、度重なるに従ひ、夜も日もなく神聖な大空を敵の魔翼が悠々と飛んで、処嫌はず爆弾を投下して国民を殺傷し、焼夷弾を投下して到る処の都市を灰塵に帰せしめてゆく。防衛部隊必死の反撃も、これを全然阻止するといふ手段はないとすれば、圧倒的な敵の物量には、血を以てしても肉を以てしても、到底対抗出来ないのではなからうか。この疑念は、今私一人が持つだけの疑念ではないやうだ。

私は、豊橋地方に於ける敵の空襲を回顧するため、第一回の初めよりその都度の模様を書き止めてきたが、戦局の前途を思へば、そんなことも或は無駄であるかも知れず、それに用箋が今は無くなつてどうしやうもない処から、この日誌もこれを以て打切るより外に仕方がない。

豊田珍彦

[解説] 5月14日は、6時過ぎに警戒警報のサイレンがなる。「志摩半島の東南方を北上する敵の目標」ありとのことだったが、「六時四十分頃それが四目標となり御前岬南方を北進する一目標の外、八丈島附近に後続の数目標があるといふ」状況となつた。やがて「七時五分にはこれが六目標となり、海上に後続機が五目標」となり、「七時五分いよいよ愛知県にも空襲警報が発令された」。この部隊は「旋回集結を終り名古屋をめざし北進」し、「八時五分、敵の第

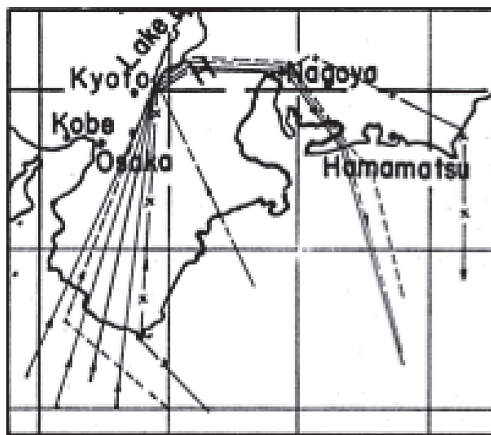
一波二十数機が名古屋に侵入した」。

そして、名古屋の爆撃を終えた敵機は「岡崎を経て程なく我が郷土の空にやつてきた」。「爆音が次々頭上に迫るので寝てゐる病人を無理に待避壕に入らせる」が、「壕中に敵機の爆音と高射砲の炸裂音と更に味方機の邀撃であらう機関砲のバリバリいふ音」が響いた。結果として「名古屋の一部及豊橋市にも火災が発生した」。「出て見ると西の方に当つて煙らしいものが立昇る」のが見えた。

米軍資料（「作戦任務報告書」）によれば、この日、第58, 73, 313, 314航空団524機により、8時5分から9時25分にかけて名古屋北部市街地の焼夷爆撃（作戦任務174）が行われた。日誌の記述はこの模様を記述したものであった。500機を超える部隊を編成したのはこれが初めてであり、しかも焼夷爆撃では初めての昼間焼夷爆撃であった<sup>6)</sup>。なお、この作戦は5月14日から6月15日まで約1カ月にわたる最終的な大都市（名古屋、東京、横浜、大阪、神戸、尼崎）焼夷爆撃の第1回目であった。

4航空団524機はマリアナ基地から硫黄島を経由して、日誌にあるように、紀伊半島南端（潮岬から田辺あたりにかけて）等を上陸地点として北上した。そして、第65図に示されるように、いわゆる琵琶湖の首を出撃地点とし、近江八幡あたりをIP（攻撃始点）として名古屋に向かった。離岸地点は第314航空団を除いて渥美半島であった。

この爆撃では、第66図に示すように、名古屋市街地の焼夷区画1（- - - - -線で囲まれた地域）<sup>7)</sup>と焼夷区画2（-----で囲まれた地域）以外に、それらと一部重なる指定市街地目標（////////////////////で囲まれた地域）数カ所設定した。それが焼夷区画1の北側の3616, 3613, 3610と番号をつけられた区画と南側の3615, 3612, 3614, 3609, 3611と番号をつけられた区画であ



第65図：5月14日の名古屋北部爆撃の飛行コース  
出所：作戦任務報告書 No.174。

る。

作戦任務174の目標となった名古屋市北部市街地は、3616, 3613, 3610の3つの地域であり、この3つの地域にそつた内側に5つの爆撃中心点を設定して爆撃したのである。工藤洋三（2015）によれば、5つの爆撃中心点に対して各航空団混成で攻撃した。また、空襲は編隊飛行によって行われた（62頁）。

この爆撃で投下した爆弾は、4航空団合計で、500ポンド集束焼夷弾 E46が12,358発、2,471トン、同じく500ポンド集束焼夷弾 E36を261発、43.5トンであった。E46, E36いずれも M69焼夷弾を集束したものである。その後の写真偵察から、この爆撃により3.15平方マイルが焼失した<sup>8)</sup>。しかし、この昼間焼夷爆撃では、11機のB-29を失うことになった。

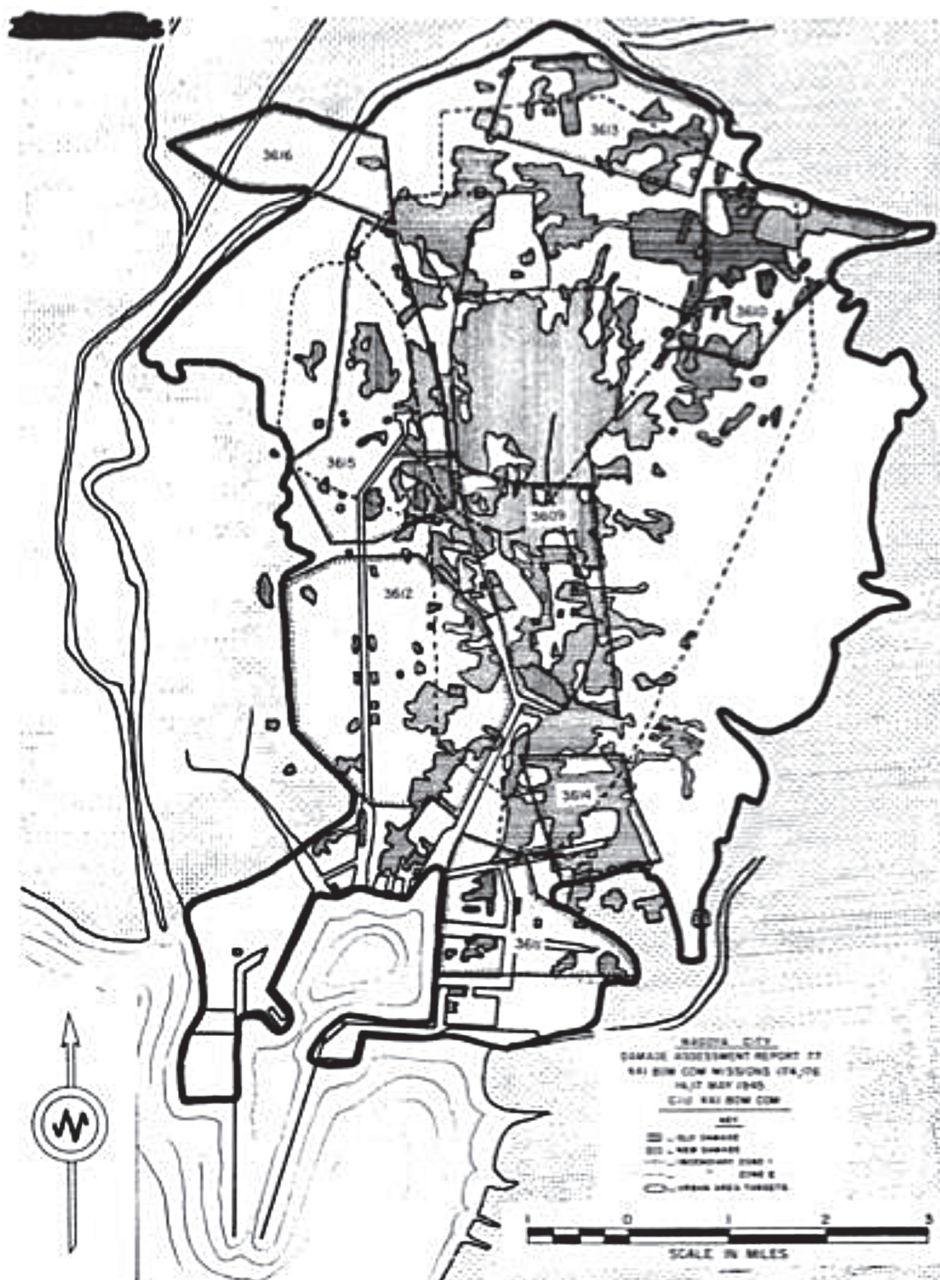
『名古屋空襲誌・資料篇』の「五月十四二日名古屋地区空襲被害状況」は、「被害地域は概ね名古屋市北部に極限せられ、而も全地点に対し中高度より投下せられたる為、各地域とも濃密度爆撃を受け防火活動に多大の困難を招来せり」と報告している。この日の爆撃で死者237

6) 前掲、工藤洋三（2015）、62頁。

7) 焼夷区画1については、本稿、第7回（2019年、第8巻第1号第2号合併号）58頁参照。

8) 「作戦任務報告書」174より。写真偵察機による爆撃後の偵察から判明した損害評価によるもの。





第66図：名古屋市街地の焼夷区画と指定市街地目標

出所：作戦任務報告書 No.174。

人、全焼・全壊家屋等22,385戸を出した。この中には、名古屋城天守閣の全焼がふくまれている<sup>9)</sup>。

日誌のなかで「豊橋市にも火災が発生」、「西の方に当つて煙らしいものが立昇る」などの記述があるが、米軍資料（「作戦任務報告書」）に

9) 名古屋空襲を記録する会 (1985) 『名古屋空襲誌・資料篇』 138頁。

第47表：防空警報発令状況

警報種別	地区名	発令	解除
警戒警報	東海道海面	六・〇〇	九・五〇
	三重愛知県地区	六・二三	九・四六
	静岡県地区	六・二四	九・四六
	岐阜県地区	六・三八	九・四六
空襲警報	三重県地区	七・〇七	九・四〇
	愛知岐阜県地区	七・五〇	九・四〇
	静岡県地区	八・〇七	九・四五

出所：『名古屋空襲誌・資料篇』127頁。

は臨機目標として豊橋を爆撃したという記録はない。豊橋市にも被曝の記録はない。しかし、『名古屋空襲誌・資料篇』には、渥美郡野田村（現田原市）の山林に爆弾が投下され、「三丁歩焼失」した記録が残っている<sup>10)</sup>。

この資料には、めずらしく14日の「防空警報発令状況」（第47表）が掲載されているが、爆撃部隊の飛行コースと関連していて興味深い。

日誌の「午前六時過ぎ、突如警戒警報のサイレンが鳴り出した」、「七時五十分いよいよ愛知県にも空襲警報が発令された」、「九時四十二分、漸く敵機の影を絶つたので空襲警報が解除になり十分遅れて警戒警報も解除」といった記述は、第47表の警戒警報、空襲警報の発令・解除の時刻とほぼ対応しているといつてよいであろう。

× × × ×

この日の日誌は最後に「高射砲が打上げられるが中々当たらない。当てる為にうつのでなく追払ふために打つやうにも見へる」と感想を述べてこの日の記述を終えている。そしてその後に「跋として」と題して、日誌の記述を最後とすることを表明している。そこでは、「ざっと半年の間に戦争の様相もすっかり変つて仕舞つた。戦局はいよいよ国家興廢の分岐点に立」つているという文章で始まり、1943年10月9日にイタリアが降伏、そして1945年5月7日にはドイツが降伏し、「兎に角我国だけで全世界を相手に戦はねばならなくなつた」ことと記述している。米軍は「夜も日もなく・・・処嫌はず爆

弾を投下して国民を殺傷し焼夷弾を投下して到る処の都市を灰塵に帰せしめてゆく」「これを全然阻止するといふ手段はないとすれば、圧倒的な敵の物量には血を以てしても肉を以てしても到底対抗出来ないのではなからうか」と絶望に近い思いを吐露している。そして、「この疑念は、今私一人が持つだけの疑念ではないやうだ」とも述べている。「戦局の前途を思へばそんなこと（敵機の来週および空襲を記述すること－筆者）も或は無駄であるかも知れず、それに用箋が今は無くなつてどうしやうもない」と結んで、一応は、筆を擱く決意をした。

しかし、理由は述べていないが、その後も『豊橋地方空襲略日誌』（第六冊）として、警報発令時刻、侵入経路、警報解除時刻、簡単なコメントなどを記録し続けた。『略日誌』第六冊が終わるのは、6月20日の豊橋空襲の2日後のことである。

『豊橋空襲略日誌』（第六冊）

【解説】日誌形式の記録も5月14日を以って終了した。そして、いよいよ、第六冊となった。既に述べたように、5月15日から6月20日までの簡単な米軍機の来襲記録であること、米軍資料（「作戦要約」）に気象観測爆撃機や写真偵察機の出撃時刻や帰還時刻が記載されなくなったことなどから、すべてを紹介することはやめて、豊橋地域が実際に爆撃を受けた5月17日、5月19日と6月20日の豊橋空襲のみ取り上げて解説することにする。ただ、5月15日から5月31日の気象観測爆撃機や写真偵察機などの動向については第48表にまとめて示した。

すでに述べたように、第XXI爆撃機集団の対日爆撃は、5月14日から次の段階に入った。最終的な大都市爆撃が名古屋をかわきりに東京、横浜、神戸、大阪、尼崎と続く。この作戦が6月15日に終了し、6月17日からは対日爆撃の最終段階としての中小都市空襲が鹿児島、大

10) 残念ながら田原市（1978）『田原市史 通史編（下巻）』には、これについての記載はない。

第48表: 1945年5月15日~5月30日の気象観測爆撃機・写真偵察機等の来襲

日付	作戦	目標	備考	日付	作戦	目標	備考
5月15日	WSM463	佐伯飛行場	12×500# GP	5月24日	WSM490	呉	10×500# GP
	WSM464	浜松地域	爆弾を搭載せず		WSM491	浜松	宣伝ビラ
	WSM465	呉	12×500# GP		WSM492	対馬海峡	
	3PRM208	駿河湾, 平塚飛行場			3PRM227	九州地域	
	3PRM210	東京			3PRM230	呉, 神戸地域	
	3PRM211	名古屋			WSM493	佐世保海軍基地	12×500# GP
	314RSM11	長崎, 佐世保地域			WSM494	神戸, 大阪地域	爆弾を搭載せず
5月16日	313NM	沖縄	4機	5月25日	WSM495		
	WSM466	沼津	6×500# GP		3PRM231	東京地域	
	WSM467	今治	10×500# GP		3PRM232	東京, 呉地域	
	WSM468	大分	6×500# GP		3PRM236	々	
	3PRM212	名古屋			3PRM235	神戸大阪地域	
5月17日	3PRM215	徳山		PCMRM2			
	WSM469	静岡航空機工場	6×500# GP	WSM496	広島, 徳山	宣伝ビラ	
	WSM470	済州島飛行場	爆弾を搭載せず	WSM497	神戸	宣伝ビラ	
	WSM471	神戸ドック地域	10×500# GP	WSM498	八幡	宣伝ビラ	
	3PRM213	名古屋		3PRM234	名古屋, 浜松, 東京		
	3PRM214	九州地域, 徳山,		3PRM237	郡山地域		
5月18日	313NM	沖縄		3PRM238	東京地域		
	WSM472	沼津鉄道操作場	8×500# GP	3PRM239	東京		
	WSM473	大分貯油施設?	6×500# GP	73NM17	硫黄島		
	WSM474	徳山曹達	6×500# GP	3PRM240-241-242	東京		
	3PRM216	名古屋地域		WSM499	名古屋	宣伝ビラ	
	3PRM217	名古屋地域		WSM500	済州島地域	爆弾を搭載せず	
	3PRM218	九州地域	中止	WSM501	呉海軍基地	12×500# GP	
5月19日	3PRM219	東京地域		3PRM243	東京		
	3PRM220	九州地域		73RSPM4	川西航空機他		
	313NM	沖縄	3機	WSM502	沼津鉄道操作場	10×500# GP	
	WSM475	済州島地域	爆弾を搭載せず	WSM503	大分車両工場	6×500# GP	
	WSM476	下田飛行場	10×500# GP	WSM504	京都	宣伝ビラ	
	WSM477	神戸-大阪地域	爆弾を搭載せず	WSM505	沼津		
	3PRM221	立川		WSM506	大分		
	3PRM222	神戸, 大阪, 名古屋		WSM507	広島		
5月20日	3PRM223	名古屋地域		3PRM244	九州地域		
	73NM15	厚木	3機, P51誘導	3PRM245	九州地域, 呉		
	3RCMRM1	母島	3機, P47誘導	3PRM246	大阪地域		
	WSM478	済州島地域		3PRM247	東京地域の飛行場		
	WSM479	佐伯海軍基地	10×500# GP	3PRM248	東京地域		
	WSM480	佐伯海軍基地	10×500# GP	3PRM249	東京地域		
	3PRM224	立川		73NM17	霞ヶ浦飛行場	3機, 50機のP51誘導	
	3PRM225	東京		314RSPM12			
	3PRM226	大阪		WSM508	鹿児島	宣伝ビラ	
	73NM16	立川	P51, 100機	WSM509	名古屋	10×500# GP	
5月21日	WSM481	対馬海峡		WSM510	大分車両工場	4×500# GP	
	WSM482	立川航空工廠		3PRM251	横浜		
	WSM483	川崎航空機工場	9×500# GP	3PRM252	横浜		
5月22日	WSM484	広島	宣伝ビラ	3PRM253	東京		
	WSM485	東京	宣伝ビラ	73NM17A	横浜	6機, 100機のP51誘導	
	WSM486	八幡	宣伝ビラ	3RCMRM3	八丈島		
	3PRM228	九州, 関門海峡, 姫路, 神戸		3RCMRM4	青ヶ島		
	3PRM229	々	爆弾を搭載せず	WSM511	東京, 横浜	宣伝ビラ	
5月23日	WSM487	済州島地域	10×500# GP	WSM512	済州島地域	爆弾を搭載せず	
	WSM488	名古屋	10×500# GP	WSM513	広島	宣伝ビラ	
	WSM489	徳山	10×500# GP				

(注) 10×500# GPは, 500ポンド一般目的弾10発を意味する。

(出所)「作戦要約」より作成。



牟田、浜松、四日市を第1回として開始された。中小都市空襲は8月14-15日まで16回54都市にわたって行われた。これと並行して航空機関連工場の精密爆撃はもちろん機雷投下作戦、石油作戦などが引き続き行われ、作戦任務は206~300まで114作戦にのぼった。

ところで、5月17日と19日を選んだ理由は、『豊橋地方空襲略日誌』（第六冊、以下では『略日誌』と略す）では、この日に豊橋地域に投弾があったと記録されていること、『豊橋市復興記念誌』では5月17日については記載がないが、米軍資料（「作戦任務報告書」）には臨機目標で豊橋に投弾したという記録があること<sup>11)</sup>、そして19日には市内花田町、小池町や豊川市の豊川工場などが被弾したことになっているからである<sup>12)</sup>。まず、17日の日誌の記録から見ていく。

## 第二〇三番

五月十七日

警戒警報 午前〇時二十五分 続いて空襲警報

侵入 五十四目標約百機

系 路 志摩半島、名古屋、豊橋、浜名湖、或は名古屋、鳳来寺山、浜松

警報解除 午前四時三十分

○少数機を以て連続攻撃し来り。夜半より天明に至る。帰途一部市の上空を通過、近くでは投弾、民家多数焼失。

## 第二〇四番

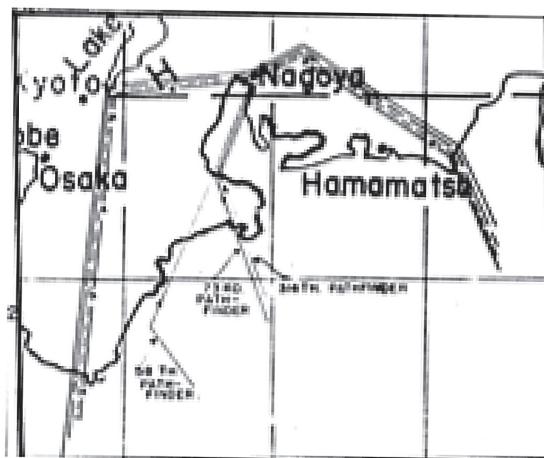
五月十七日

警戒警報 午後一時十五分

侵入 二機

系 路 (一) 名古屋、岡崎、渥美半島

(二) 比叡山、関ヶ原、瀬戸、岡崎、伊勢湾



第67図：5月17日名古屋南部空襲の飛行コース

出所：作戦任務報告書 No.176。

警報解除 午後二時〇分

○烈風と飛雲の中に爆音きこえ、待避信号なるも敵影を見ず。

[解説] 5月17日は深夜の0時25分に警戒警報が発令され、つづいて空襲警報となった。侵入経路は志摩半島から名古屋、そして豊橋、浜名湖から、あるいは鳳来寺山、浜松から海上へ抜けたと見られる。攻撃は少数機で夜半から夜明けにかけて続いた。その帰路に豊橋上空を通過の際に投弾し、民家が多数焼失したと読める。

この日、14日につづいて第58、73、313、314航空団合計512機のB-29が今度は2時5分から4時52分にわたって名古屋市南部を爆撃した。4航空団の飛行ルートを見ると、いずれも主力部隊は硫黄島を経由して潮岬から上陸し、そのまま北上して琵琶湖の首あたりをIPとして右旋回、東進して目標である名古屋に向かった。そのことは第67図から明らかであるが、この図にはいつもと異なって第58、73、314航空団の先導機の飛行コースが描かれていて興味深い。

11) 「作戦任務報告書 (No.176)」および「日本本土爆撃詳報」(東京空襲を記録する会 [1975]『東京大空襲・戦災史 第3巻』講談社、1012頁)によれば、第314航空団の1機が、この機は第1目標である名古屋市南部を爆撃した上で、帰路、日本時間で2時57分に高度約7,700mから焼夷弾17発、4トンを投下したことになる。

12) 「作戦任務報告書 No.178」および「日本本土爆撃詳報」によれば、第73航空団の1機が日本時間11時16分に高度約7,315mから500ポンド一般目的弾24発6トンを投下した。



距離を短縮するためか、それぞれの部隊の先導機 (Pathfinder) は志摩半島の波切またはさらに西から半島を北上、松坂付近から伊勢湾を名古屋に向かっていく。

この日の名古屋爆撃は名古屋市南部地域に目標が設定されていた。4月14日の名古屋市北部爆撃の時に示した第66図の指定市街地目標3609, 3611, 3612, 3614のそれぞれに爆撃中心点を設定した。この爆撃中心点に先導機がM47A2を投下、主力部隊は主としてM17A2を投下した。M17A2はM50焼夷弾110本を2段に集束したクラスター爆弾で、M69より貫通力が高かった。この集束焼夷弾が選ばれた理由は、名古屋市南部地域には工場地域やドック地域が広がっていたからであった<sup>13)</sup>。

米軍資料 (「作戦任務報告書」No.176) によれば、それぞれの航空団のB-29が第1目標に投下した爆弾は、500ポンド集束焼夷弾M17A1, 13,627発(3,06.7トン), 100ポンド焼夷弾M47A2, 3,766発(126トン), 500ポンド集束焼夷弾E46, 378発(75.6トン)などであった。これにより3.82平方マイルが焼失したと報告されている。

『名古屋空襲誌・資料編』によれば、この空襲による死者は213人、全焼・全壊戸数は22,948戸であった<sup>14)</sup>。なお、『略日誌』に「帰途一部市の上空を通過、近くでは投弾、民家多数焼失」とあり、米軍資料も第314航空団の1機が臨機目標として豊橋を爆撃したことになっている。『新編豊川市史』では、宝飯郡一宮村江島 (現豊川市) が爆撃されて死者1人、全焼18戸の被害が出たとしている<sup>15)</sup>。

なお、5月17日の記録では13時15分に警戒警報が発令された。侵入機は2機で、1機は名古屋から岡崎を経て渥美半島に抜け、1機は関西方面から瀬戸、岡崎を経て伊勢湾に抜けた。こうした少数機の来襲については、米軍資料 (「作戦要約」) が出撃時間や帰還時間を5月中

旬以降、ほぼ記載しなくなったため、日本への到着予想時刻を推測することが不可能になった。このため、日本到着予想時刻による日付ではなく、作戦要約に記載された日付 (5月15日の場合は、5月15日の2400Kまでに出撃したもので、作戦名と目標等だけを5月末まで示すと第48表の通りである。

次に5月19日の『略日誌』の記述を見てみよう。

## 第二〇八番

五月十九日

警戒警報 午前九時五十分

侵入 一機

系 路 浜名湖旋回、友軍機の攻撃を受け南方へ遁走

警報解除 午前十時十五分

○曇り日の空に東方より高射砲の音に交つて爆音きこゆ。

## 第二〇九番

五月十九日

警戒警報 午前十時四十五分 続いて空襲警報

侵入 相当多数。後聞九十機

系 路 相模湾及御前岬附近より侵入。主力は関東に向ふ。一部を以て浜松、豊橋を攻撃

警報解除 ○時十分頃

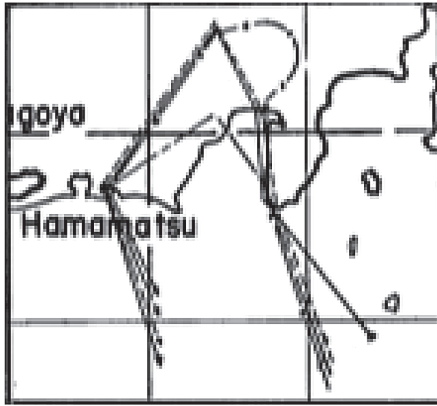
○曇天を雲上より盲爆。浜松殊に甚だし。市の附近、高師、野依、八幡、麻生田 (推定) 投弾さる。後聞、柳生運河、植田、海軍工廠、犬ノ子なりと。

[解説] 5月19日はまず、9時50分に警戒警報が発令されたが、浜名湖を旋回して南方に去った。次の警戒警報は10時45分で、つづいて空襲警報が発令された。相模湾および御前崎付近から侵入して主力は関東地方へ「一部が浜松、豊橋を攻撃」と記している。曇天の空から豊橋地

13) 作戦任務報告書 No.176。

14) 前掲、名古屋の空襲・戦災を記録する会 (1985)。

15) 豊川市 (2007) 『新編豊川市史 通史編第3巻近代』1032頁。



第68図：5月19日浜松空襲の飛行コース

出所：作戦任務報告書 No.178。

域も爆弾を投下され、最終的に「柳生運河、植田、海軍工廠、犬ノ子<sup>16)</sup>」と判明したと記載している。

この日、0時52分から2時9分にかけて関門海峡等为目标とした機雷投下作戦（作戦任務177）と、立川陸軍航空工廠・立川飛行機工場を第1目標、浜松をレーダー第1目標とする作戦（作戦任務178）が実施された<sup>17)</sup>。10時45分の警戒警報は、作戦任務178に向けられたものであった。

この立川陸軍航空工廠等への爆撃作戦は、4月30日につづくもので、第58、73、313、314航空団の合計309機が日本時間19日2時45分～4時25分にかけてマリアナ基地を離陸し、19日9時57分～11時32分に伊豆半島波勝岬付近を出撃地点として北上し、富士市付近から上陸、立川に向かう予定であったが、4月30日と同様に第1目標のある立川上空は密雲に覆われていたため、レーダー第1目標である浜松の爆撃に変更した（第68図参照）。この目標の場合は身延山付近をIPとして浜松へ向かうことになっていた。

こうして10時51分から11時58分にわたって

272機が浜松に対して主に500ポンド一般目的弾、M64A1を5,944発（1,486トン）投下した。この他、14機が臨機目標に投弾したが、このうちの第73航空団の1機が豊橋に爆弾を投下している。米軍資料によれば、第73航空団の1機で、日本時間の1時18分に高度約7,300メートルから500ポンド一般目的弾M64、24発（6トン）を投下した<sup>18)</sup>。被害地域は、市全体に分散しており、この空襲による浜松市の被害面積は、合計620万平方フィートで、これは市全体の約5%にあたった。浜松市の記録によれば、死者391人、全焼・全壊3,817戸であった<sup>19)</sup>。

『豊橋市戦災復興誌』によれば、花田町中郷、小池町が被災した（57頁）。日誌では「柳生運河、植田、海軍工廠、犬ノ子」とあり、豊橋と豊川にまたがって投弾されたことがわかる。『新編豊川市史』によれば、爆撃されたのは、豊橋では高師、野依、植田、柳生運河で死者2人、豊川では土筒、三谷原、他に一宮、田峯で死者合わせて7人を出した。この日は豊川海軍工廠も爆撃され約30人の犠牲者を出した（1032頁）。B-29の進行方向は豊橋から豊川に向けてほぼ一直線であったようであるが、投弾したのは一機ではなく、2機だったという記載もある。

以下では、一夜にして豊橋市街地が灰塵に帰した6月20日の豊橋空襲についてみていきたい。当日の『略日誌』の記述から見ていこう。

#### 第二五四番

六月二十日

警戒警報 午前〇時へ二十分前 二十分後空襲警報  
 侵入 十数目標  
 系 路 初め志摩半島より侵入、若狭湾に至り機雷投下の後、引返し南方へ。更に我が市に向つて集中焼夷弾攻撃を行ふ。全市灰燼。

16) 現在の院之子町辺りか。

17) 阿部聖（2008）「1945年4月30日と5月19日の浜松空襲」『空襲通信』第10号、33～40頁参照。

18) 「作戦任務報告書 No.178」。

19) 阿部聖（2006）『米軍資料から見た浜松空襲』愛知大学総合郷土研究所ブックレット12、53頁。

警報解除 午前五時頃

○この時の情勢は別記する。即ち、

敵の都市に対する集中焼夷攻撃は、順次、大都市より中小都市に及び、我が市の如き当然予期されし所なるを以て、南北に三条の強制疎開線を設け、市民また家財の疎開に狂奔。遠くは本郷、田口に及びたりき。本夜、敵は初め若狭湾に機雷投下、引返しつつあり。程なく解除せらるべしと油断せしに、突如、鉾を当市に向け集中焼夷弾攻撃を見るに至る。初め市の南部に火の手挙るや、中心地区の市民先づ雪崩をうつつ市外に脱れんとし、消火に努むるものなく、火勢は敵の攻撃と共に愈々熾烈となり、果は全市一団の猛火となり、僅か数時間にして全くの焼野原となる。我家、幸いにして災を遁れ、一代苦心聚集の書籍を全ふすることを得たるも、友人にて罹災せしもの九地十域、高橋高馬、藤村一舟、市川丁子、舟橋水哉、久野典之、大川智香、倉光説人、近藤直次、近藤信彦の十氏に及び、別に□安清次郎、森誠両家より、知人に至りては枚挙に遑あらず。彼の関東大震災を遙かに超越せし大悲慘事を招来せり。

この攻撃により神社の罹災炎上二十ヶ所に達す。即ち

村社 豊城神社	村社 八幡社
村社 談合神社	無格社 金毘羅神社
無格社 大区責社	村社 諏訪神社
村社 松山神社	村社 野口神明社
村社 白山比咩神社	無格社 天神社
村社 安海熊野神社	無格社 輪潜神社
村社 八剣神社	村社 小浜神明社
郷社 牟呂八幡社	無格社 大西神社
無格社 羽黒神社	無格社 秋葉神社
無格社 若宮八幡社	楠公祠

の各社にして誠に恐懼に堪へざる次第なり

× × × × ×

思ふに、これだけ敵の思ふがままの攻撃を受けながら高射砲一発打つでなし、味方機が出て戦ふでなし、敵のやるがままに任せ、市民また敢て火を防がふといふでなし、逸早く逃げ出して焼けるがままに任せる。そんなことでよいだらうか。また、軍に反

撃する力がないのか市民に事故を守る熱意がないのか。こんなことで戦争に勝てる筈がない。近頃、敵の攻撃ぶりを見ると、逆もこの戦争に我国に勝目がない。或は、敗けるのではないかとの予感がする。然し、そんなことを一言でも口外したら、忽ち非国民としてどんなめに遭ふかも分らぬから下手なことは言へぬが、実際、この焼野原を見て戦争に希望が持てないのは私一人ではあるまいと思ふ。

嗚呼、悠久三千年の我国にもどんなことが起きるか分りはしない。さう思ふと、この空襲日記を続けるのも無駄だ。我が市の全滅を期会に筆を擱かう。

昭和二十年六月二十二日 うづひこ

[解説]『略日誌』の記録によれば、6月19日の23時50分に警戒警報が発令された。空襲警報が発令されたのは、それから20分後の24時10分ということになる。しかし、「初め志摩半島より侵入、若狭湾に至り機雷投下の後、引返し南方へ。更に我が市に向つて集中焼夷弾攻撃を行ふ」とあるように、豊橋を爆撃したのは若狭湾に機雷を投下した部隊であったと考えていたようである。

日誌の「別記」では、「集中焼夷攻撃は、順次、大都市より中小都市に及び、我が市の如き当然予期され」ていた。このため「南北に三条の強制疎開線を設け、市民また家財の疎開に狂奔。遠くは本郷、田口に及」んだと述べている。そして爆撃の様子を次のように記している。「初め市の南部に火の手挙るや、中心地区の市民先づ雪崩をうつつ市外に脱れんとし、消火に努むるもの」もなかったこと、「火勢は敵の攻撃と共に愈々熾烈となり、果は全市一団の猛火となり、僅か数時間にして全くの焼野原とな」った。そして、「我家、幸いにして災を遁れ、一代苦心聚集の書籍を全ふすること」ができたとしている。

最後に、「敵の思ふがままの攻撃を受けながら」「敵のやるがままに任せ」るしかない状態で「こんなことで戦争に勝てる筈がない」、「或は、敗けるのではないかとの予感がする」とまで述べ、「この空襲日記を続けるのも無駄だ」



として筆を擱く決断をしている。

すでに述べたように、都市の焼夷空襲については最終的な大都市爆撃が6月14日で終了した。東京、大阪、名古屋をはじめとする大都市はすでに灰塵に帰した。6月17日からは、第1回の浜松、四日市、大牟田、鹿児島をかわきりに、中小都市焼夷爆撃が開始された。豊橋市は静岡、福岡と並んで第2回中小都市空襲の目標となった<sup>20)</sup>。



第69図：6月20日の豊橋および静岡空襲の飛行コース

出所：作戦任務報告書 No.210～212。



第70図：豊橋市のリトモザイク

出所：「豊橋市損害評価報告書」。

20) 工藤洋三 (2015) は、「なぜこれらの都市が早い段階で選ばれたかについては・・・記載がない」。第1回、第2回の7都市の共通点としてあげられるのは「いずれも対空砲火が比較的弱いと考えられていたこと」であると述べている (89頁)。

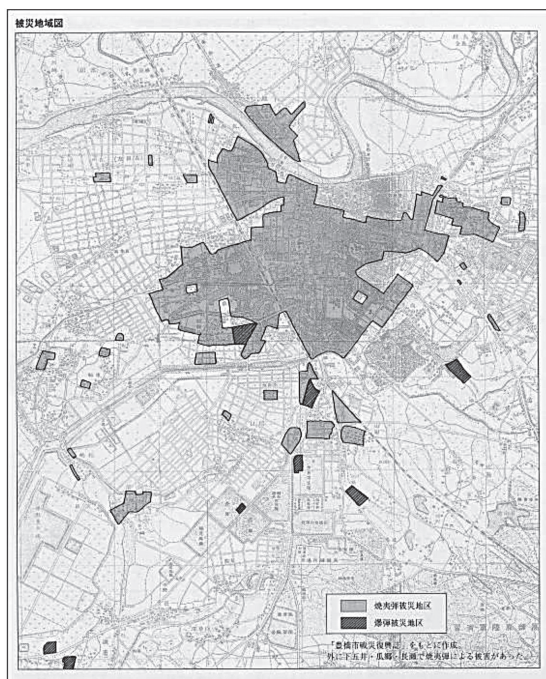


米軍資料（「作戦任務報告書 No.210」）によれば、6月19日に豊橋市街地を目標として出撃したのは、第58航空団の141機であった。同部隊はマリアナ基地から硫黄島を経由して、20日0時40分～2時49分に志摩半島波切の西から上陸して北上、松坂をIP（爆撃始点）として伊勢湾、三河湾を横断して豊橋に向かった（第69図参照）。目標上空時刻は、20日0時58分～3時17分であった。高度爆撃後は右旋回して太平洋へ抜けた。

中小都市空襲でも、豊橋市街地のリトモザイク（石版集成図、第70図）上の豊橋市街地中心部（広小路と259号線の神明町交差点あたり）に点（爆撃中心点）を打ち、そこから半径4,000フィート（約1.2km）の円（確率誤差円）を描いて、その円内に焼夷弾を投下するよう計画された。先導機12機が、爆撃中心点に向けてM47A2<sup>21)</sup>などの焼夷弾を投下して、アプライアンス（消防車の必要な、消火隊の手に負えない）火災を発生させ、後続の主力部隊がその火災をめがけて焼夷弾を投下した。

第58航空団の136機、うち先導機12機が20日0時58分から1時22分にかけて焼夷弾を投下、それに続く主力部隊124機が1時6分から3時17分にかけて爆撃を行った。この爆撃で投下されたのは、主にM47A2焼夷弾12,193発（420.4トン）で、これ以外にはM69焼夷弾を集束したE46は2,226発（445.2トン）、同じく500ポンド集束焼夷弾、E28は、440発（73.3トン）、500ポンド集束焼夷弾、M17A1は、30発（7.5トン）であった。米軍資料（「損害評価報告書」等）は、この爆撃により市街地の1.7平方マイル、市街地面積の52%が焼失したと報告している<sup>22)</sup>。

『豊橋市戦災復興誌』（63～64頁）によれば、この空襲による焼失面積は128万6,155坪（第71図参照）、死者は624人、全焼・全壊は16,886戸（全戸数の70%）に上った。



第71図：豊橋市の被災地域地図

出所：元資料は『豊橋市戦災復興誌』別冊、ただし、引用は、総務省 HP ([https://www.soumu.go.jp/main\\_sosiki/Daijinkanbou/sensai/situation/state/tokai\\_07.html](https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/Daijinkanbou/sensai/situation/state/tokai_07.html))。

実はこの日、第313航空団の28機が機雷投下で関門海峡、新潟、宮津、舞鶴を目標として出撃した（作戦任務213、スターベーション作戦番号24）。この部隊の上陸時刻は日本時間では19日22時47分～20日0時30分、目標上空時刻は19日23時13分～20日1時13分、離岸時刻は19日23時52分～2時58分とされている<sup>23)</sup>。このうち、若狭湾の宮津と舞鶴を目標にした部隊は上記の時間内に志摩半島の波切付近から上陸、そのまま北上して若狭湾に向かい目標海域に機雷を投下した後、往路とほぼ同じルートを引き返した。この部隊がまず愛知県の警報の対象になった。日誌に見られるようにこの機雷投下部隊が、機雷投下後、戻ってきて豊橋を爆撃したような錯覚も仕方ないことであろう。

21) この焼夷弾は、①消火隊が近づけないほどの爆発性がある、②後続の機のための目印となる激しい炸裂を起こす、という2つの特徴をもつ。

22) 豊橋市の空襲については、中山伊佐男（2003）「『空襲損害評価報告書』に見る豊橋空襲」『空襲通信』第5号参照。

23) 「作戦任務報告書」。この6月19～20日にかけての作戦の任務番号は213、機雷投下任務番号24となっている。

第58航空団の136機（内12機は先導機、5機は無効機）は、機雷投下部隊の時間と重なるように上陸して目標に向かっているからである。このため、『豊橋誌戦災復興誌』（60頁）にあるように、23時すぎに発令された警戒警報は機雷投下部隊に対するものと考えられ、それが12時すぎに解除されるものの、間もなくいきなり空襲警報が発令されるような結果になってしまったと考えられる。

こうして、豊橋市街地は約2時間にわたる焼夷爆撃により灰塵に帰ってしまった。日誌の筆者は「我が市の全滅を期会に筆を擱」くことになる。顧みれば、1944年11月23日のB-29来襲を機にこの空襲日誌を書き始めて、ほぼ半年、連日のように豊橋上空を通過する敵機の来襲を伝えるラジオ情報と自らの想いだけでなく、戦時下の生活の一部（隣組や防空活動、待避壕の掘削など）もまた書き留めてきた。5月14日を境に記載の形式は変わるとはいえ、豊田氏が数え、記録した警報の数は240回以上に上る。そして、市内に投弾があれば、しばしば現地に赴いて状況を記録している。並大抵の精神力ではなかなか成し得ないことであると考ええる。

今回、このような形で豊田珍彦氏の空襲日誌の紹介をほぼ全うできたのは、日誌の記述にあらわれた同氏のひたむきな生き方に、心打たれたからだと感じている。それは戦時下という厳しい状況のもとで、病に臥せる妻を守り、家財を守り、地域住民に心を配るかたわら、連日、敵機の来襲をラジオ情報と目視によって一心に記録するというひたむきさといえようか。そうした彼の日誌を翻刻するだけでなく、米軍資料で裏付けながら客観的に読み直してみたいというのが当初の気持ちであった。日誌の紹介を終わってみて、この日誌が米軍の対日空襲の一端を伝える重要な資料であることを改めて確認できたと考えている。

とはいえ、日誌の発見から日誌の紹介を決断するまでには、長い期間が必要であった。この日誌の記述を客観的資料でどう裏付けるかという問題があったからである。この裏付けは、大

規模爆撃を記録した作戦任務報告書だけでなく、その後、気象観測爆撃機や写真偵察機などの出撃に関する速報とも言える「作戦要約（または概要）」といった資料、米機動部隊やP51の作戦などに関する文献・資料と巡り合うことによってはじめて可能となった。とはいえ、日誌の紹介という点でも、裏付けという点でも決して十分ではないことは自覚しており、今後の課題と考えている。

地域政策学ジャーナルの第1号に日誌の紹介を掲載し始めて、ここまで10年以上かかってしまったが、最終回を迎えることができほっとした気持ちである。豊田珍彦氏のご子息が亡くなられた後、養子として同家を継いでいらっしゃる豊田俊彦氏からも本校の執筆にあたたかい励ましのお言葉をいただいた。最後まで日誌の紹介を続けられた要因の一でもある。また、全国空襲戦災を記録する会と米軍資料の調査・研究に関する会にも参加させていただいて、工藤洋三氏はじめ、たくさんの方々から資料をいただいたり、助言をいただいたりした。皆さまには改めてお礼申し上げたい。

<終わり>

## 補論：豊橋空襲の爆撃開始時刻について

### 1. はじめに

拙稿「豊田彦彦『豊橋地方空襲日誌』を読む」では豊橋空襲については、ほぼ6月20日と記載してきた。実は、豊橋空襲の爆撃開始時刻については、大きく二つの説がある。豊橋市の公式記録とも言える『豊橋市戦災復興誌』の19日23時43分説<sup>24)</sup>と、米軍資料(「作戦任務報告書 No.210」)の20日0時58分説である。この両説は、どちらの説をとるにせよ、これまで決定打はなく解決に至らないまま推移しており、豊橋空襲をめぐる課題の一つとなっている。こうした現象は中小都市空襲で被災した都市では決してめずらしいことではない。

ただ、最近になって、爆撃開始時間を23時43分とする新しい証言が得られたとするニュースが話題となった。2018年6月27日付の『中日新聞』は次のように伝えている。「新たな証言をしたのは、空襲直前に豊橋駅を発車した列車の機関士川端新二さん(89)。昨年、豊橋空襲に関する本紙記事をきっかけに図書館に証言を申し出た。

川端さんは当時、豊橋駅に停車していた大阪発東京行きの夜行列車に乗務。図書館の聞き取りに『空襲を避けるために定刻二分前に発車し、約二分後に豊橋駅付近で空襲が始まった』と回答した。

図書館が当時の時刻表を調べたところ、列車は豊橋駅に二十日午前零時二分着、同五分発の予定。川端さんの証言から、列車は実際には午前零時三分ごろに出発していたことが判明。定刻前の出発を指示していた豊橋駅長らは、市内の一部で空襲が始まっているとの情報を事前に得ていたとみられ、十九日開始の可能性が強まった。

逆に、市政五十年史の「二十日午前零時四十分ごろ」や米国の作戦任務報告書の「二十日午前零時五十八分」の可能性は低くなった。」

その後、以上のような証言や調査をもとに、岩瀬彰利(2020)『令和に語り継ぐ豊橋空襲』(人間社)

が出版された。同書は豊橋市の空襲開始時間について「川端さんの証言で、駅周辺には『豊橋駅勢要覧』に記載されている午前0時5分ごろという時刻に空襲がおこなわれていたことが裏付けられました。この事実は米軍記録の作戦開始時間が誤りであることを示しており、・・・『19日午後11時43分ごろ』が正しいものと判断できます」(71頁)と述べている<sup>25)</sup>。

本補論は、以上のような最近の議論を踏まえて、豊橋空襲の開始時間について、これまでの日本側資料や米軍資料をもとに再検討するものである。それは第1に、これまで空襲開始時間についての議論があったにもかかわらず、豊橋空襲に関する日本側資料や米軍資料が十分に検討されてきたわけではないということ、第2に、関係者の証言は重要であり尊重されねばならないが、それを証拠として使用する際に、必ずしも客観的な資料の裏付けが十分ではなかったのではないかと考えるからである。

なお、空襲開始時間をめぐっては豊橋空襲と同日ほぼ同時刻に爆撃された静岡市の事例を取り上げ、参考としたい。同市でも19日説と20日説の両論あったが、その後の防空監視哨記録の調査によりほぼ開始時間が確定した。

### 2. 豊橋空襲を伝える資料

#### (1) 日本側の資料

はじめに『豊橋市戦災復興誌』の豊橋空襲に関する記述から見ていきたい。まず、「午後11時過ぎ警戒警報、しばらくして空襲警報が発令された。」ラジオ情報によれば「志摩半島から侵入の敵機は若狭湾に機雷投下の模様」と伝え、まもなく空襲警報は解除となったと、記している。次に、ラジオ情報が「敵の1機北上中」と放送した時には、「柳生川運河北方方面は燃えはじめた。6月19日11時43分頃であった」としている。以後、豊橋市街地は焼夷弾の雨に打たれることになる。ただし、同書は「豊橋市に対する空襲開始の時間については諸説があり、20

24) 豊橋市戦災復興誌編纂委員会(1958)『豊橋市戦災復興誌』60頁。

25) 同書によれば『豊橋駅勢要覧』には「0時5分、空襲警報いまだ出ていないのに、西南方に投弾」と記載されている(70頁)。



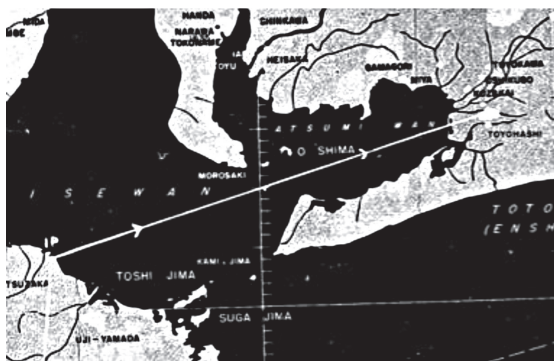
日未明が正しいとも云われる」とも断っている（60頁）。

この11時43分という時刻が客観的な資料、例えば、東海軍管区司令部の発表などにもとづいているわけではなく、関係者の証言をもとに決定されたと思われるふしがある。にもかかわらず、その後は11時43分が一人歩きすることになると言っている。

豊橋空襲の翌日の新聞記事はどのように伝えているだろうか。6月21日付『朝日新聞』は、「B29の中小都市空襲激化」「豊橋静岡へ二百機 焼夷攻撃で火災発生」と題して「東海軍管区司令部発表（昭和二十年六月二十日十二時）マリアナ基地の敵B29約二百機の中約九十機は本六月二十日零時四十分より逐次志摩半島に侵入し渥美湾北部を経て豊橋市付近に焼夷攻撃を行ひたるのち、概ね三時すぎ頃までに浜松附近より南方に脱去」。また、静岡については「概ね同時刻の爾余の約百十機は伊豆半島および駿河湾口を経て逐次静岡附近を焼夷攻撃したる後、御前崎附近より南方に脱去」と伝えた。また「これがため静岡および豊橋市内各所に火災発生したるも静岡は概ね五時頃、豊橋は概ね八時頃概ね鎮火」した。以上から明らかなように、東海軍管区司令部は、豊橋を爆撃した部隊は「六月二十日零時四十分より逐次志摩半島に侵入」した。

一方、同日の記事はまた「若狭湾に機雷投下」と題して「十九日午後十一時頃から二十日午前二時過ぎの間、紀伊半島南方洋上を北進したB29八十機のうち三十数機は・・・若狭湾に侵入、機雷投下のち十一時五十五分から二十日午前一時過ぎ・・・東海軍管区に侵入した」と報じた。豊橋を空襲する部隊が志摩半島に上陸する直前まで若狭湾の機雷投下部隊が行動していたことがわかる。

各地の空襲記録はどうであろうか、『略日誌』の著者の記録についてはすでに見た通りである。『豊西村空襲記録』は、19日23時30分警戒警報、23時48分空襲警報としている。空襲解除は20日3時33分であった。そして、「敵約五十目標機静岡市及豊橋



第1図：6月20日豊橋空襲の際の爆撃行程

出所：作戦任務報告書 No.210～212。

市ヲ焼夷弾ニヨル空襲アリ西方及東方ノ空真赤ニ見ユ焼夷弾落下光多数見ユ全市灰ニナリタルモノト思フ」と記している。また、『三重の空襲時刻表』は、19日23時42分に警戒警報、19日23時57分に空襲警報が発令されたとしている。そして、空襲解除は20日3時26分となっている<sup>26)</sup>。

最後に、『国鉄の空襲被害記録』では、新潟および若狭湾への機雷投下とは別に「20日0時40分頃、B29約110機は静岡地区へ、約90機は豊橋地区に來襲、主に焼夷弾を投下し、3時30分頃までに・・・退去した」としている。この空襲により、東海道本線は「静岡を中心として東西1.5km 間沿線火災のため不通（開通上下線20日10時20分）」、また「豊橋構内、車両、建物の焼失のため不通<sup>27)</sup>」となった。

## (2) 米軍資料

作戦任務報告書210の概要についてはすでに見た。ここでは第58航空団136機がマリアナ基地（テナアン）から目標上空にいたる時間的経過を確認しながら見ていきたい。その際、ほぼ同じ時刻に静岡を爆撃した第73航空団の137機と比較するとともに、中小都市空襲で東海地域の他の都市の場合とも比較していく。

第58航空団の141機がテナアンを出撃したのは。日本時間で19日18時13分から19時43分（所要時間1

26) 津の空襲を記録する会（1986）『三重の空襲時刻表 1942.4.18～1945.8.15』26～27頁。

27) 国鉄の空襲被害記録刊行会（1976）『国鉄の空襲被害記録』（集文社）、99～101頁。



第1表：東海地域都市空襲の際の出撃・爆撃・帰還の各時刻と所要時間

作戦番号・目標 (航空団)	出撃時刻	硫黄島通過時刻	上陸時刻	IP～目標 距離・時間	目標到達時刻	帰還時刻
TMR208・浜松市 (73)	170902Z 171802	171218Z 172118 (3時間16分)	171544Z 180044 (6時間42分)	40miles (約64km) 9分	171559Z 180059 (6時間57分)	172323Z 180823 (14時間21分)
TMR209・四日市市 (313)	170956Z 171856	171312Z 172212 (3時間14分)	171630Z 180130 (6時間34分)	35miles (約56km) 8分	171638Z 170138 (6時間42分)	172209Z 180709 (12時間13分)
TMR210・豊橋 (58)	190913Z 191813	191221Z 192121 (3時間08分)	191540Z 200040 (6時間27分)	43miles (約69km) 8分15秒	191559Z 200059 (6時間46分)	192219Z 200719 (12時間59分)
TMR212・静岡 (314)	190920Z 191820	191255Z 192155 (3時間35分)	191544Z 200044 (6時間24分)	29miles (約46km) 7分	191551Z 200051 (6時間31分)	192233Z 200733 (13時間13分)
TMR253・清水 (313)	060849Z 061749	061206Z 062106 (3時間17分)	061506Z 070006 (6時間17分)	35miles (約56km) 10分	061533Z 070033 (6時間54分)	062100Z 070600 (12時間11分)
TMR260・岐阜 (314)	090700Z 091600	091040Z 091940 (3時間40分)	091401Z 092301 (7時間01分)	41miles (約66km) 8分40秒	091434Z 092334 (7時間34分)	092059Z 100559 (13時59分)
TMR264・一宮 (73)	120905Z 121805	121213Z 122113 (3時間08分)	121521Z 130021 (6時間16分)	42miles (約67km) 9分30秒	121553Z 130053 (6時間48分)	122147Z 130647 (12時間47分)
TMR271・沼津 (58)	160907Z 161807		161503Z 170003 (5時間56分)		161613Z 170113 (7時間06分)	162203Z 170703 (12時間56分)
TMR273・桑名 (313)	160931Z 161831		161549Z 170049 (6時間18分)		161625Z 170125 (6時間54分)	162157Z 170657 (12時間26分)
TMR280・岡崎 (314)	190908Z 191808	191227Z 192127 (3時間19分)	191536Z 200036 (6時間28分)	50mile (約80km) 11分	191558Z 200058 (6時間50分)	192238Z 200738 (13時間30分)

注：TMR は作戦任務報告書の略。各項目の上段は世界時間 (Z 時)，中段は日本時間，下段 ( ) 内は所要時間。

出所：作戦任務報告書 No.206～209, 210～212, 251～255, 257～261, 263～267, 271～274より作成。

時間30分)である。この部隊が約1,177km離れた硫黄島上空を通過するのは、19日21時21分から23時2分(所要時間1時間41分)、そして硫黄島から志摩半島波切西方50kmに上陸するのは20日0時40分から2時47分(所要時間2時間17分)であった。上陸後はそのまま北上して、松坂市をIPとして東北東へ伊勢湾、渥美湾を横断、途中、篠島を通過目標にして豊橋へ向かった。松坂-豊橋間約69km、この距離を8分15秒で豊橋上空に達して、爆撃を開始した。侵入地点は、第1図からも明らかのように、現在の豊橋港および明海付近である。先導機および爆撃部隊の豊橋上空時間は20日0時58分から3時17分(全機が爆撃を終了するまでに要した時間は、2時

間19分)であった(第1表参照)。

整理すると、上陸時刻0時40分、約11分かけてIP地点まで行って、IPから目標まで約8分という計算になる。そして141機が約2時間にわたって次々と焼夷弾を投下した。

先導機は、6時間41分かけて基地から上陸地点(南伊勢)まで航行したと考えられ、その場合、時速361km/hとなる。19日18時13分に基地を出撃し、爆撃開始が23時43分だとすると、この先導機は、5時間30分で2,334km+(上陸地点からIPまでの距離約35km+IPから目標までの距離43km)=2,412kmを飛行したことになる。その場合、B-29は、438km/hで飛行しなければならない。これは、必ずしも不可

第2表：航空団基地から目標までの距離とB-29の航行速度

目標	部隊	基地 (a)	上陸地点 (b)	IP	(a)-(b)の距離	所要時間	時速
浜松	73	サイパン	大王崎	伊良湖岬	2,299km	6.7時間	343km/h
四日市	313	テニアン	伊良湖岬	伊良湖岬	2,340km	6.56	356km/h
豊橋	58	テニアン	南伊勢	松坂	2,334km	6.45	361km/h
静岡	314	グアム	波勝	波勝	2,438km	6.4	380km/h
清水	313	テニアン	大島	伊東	2,282km	6.28	363km/h
岐阜	314	グアム	尾鷲	塩津	2,451km	7.0	350km/h
一宮	73	サイパン	尾鷲	塩津	2,307km	6.27	368km/h
沼津	58	テニアン	御前崎	御前崎	2,307km	5.93	389km/h
桑名	313	テニアン	尾鷲	琵琶湖	2,321km	6.3	368km/h
岡崎	314	グアム	大王崎	大王崎	2,448km	6.46	379km/h

(注) それぞれの基地と上陸地点までのおよその距離は Google 検索による。

(出所) 各作戦任務報告書 (TMR) より作成。

能な速度ではないと思われるが、第2表からも明らかのように、一部の例外をのぞいて、巡航速度に近い350～360km/hであることを考慮すると、ちょっと考えられない速度である。豊橋空襲当日には、それぞれのB-29は、焼夷弾を平均16,000ポンド(7.2トン)近く搭載し、燃料を約5,000ガロン(1.9キロリットル)搭載して、往復約5,000kmの距離を航行しなければならず、高度や速度の面で経済的な航行が求められたと言って良いだろう。

豊橋空襲は、中小都市空襲において、東海地域における諸都市とどのような関係にあるのかについて次に見ていきたい。第1表に、爆撃順に浜松、四日市、豊橋、静岡、清水、岐阜、一宮、沼津、桑名、岡崎の10都市について出撃・硫黄島通過、上陸、目標上空到達時刻等を示すとともに、所要時間を示した。出撃時刻は日本時間で18時前後(例外は岐阜のみ)である。上陸後のIPから目標上空までの距離は例外もあるが40～50kmで、8分～10分程度で、目標上空到達時刻は平均約6時間半である。

上陸地点までに要する時間は6時間30分前後、7時間以上かかることはほぼないと言ってよい。第2表からもわかるように、マリアナ基地から上陸地点までの距離にそれほど大きな差がなく、したがって、離陸から上陸地点までの飛行速度も350～370km/h程度となっている。

### 3. 静岡空襲についての研究とその成果

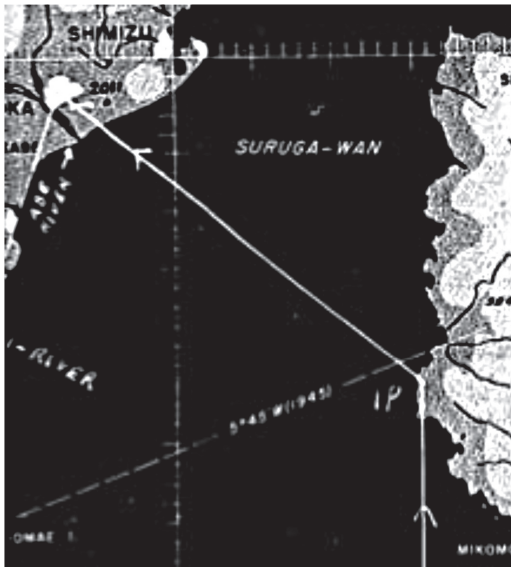
静岡空襲については、すでに簡単にふれたように、公的な記録による空襲開始時刻と空襲を体験した市民の証言との間に大きな時間的ずれが見られた。以下では、(1) 戦中・戦後の静岡空襲についての資料・文献を確認、(2) 米軍資料を検証した上で、(3) 戦中・戦後の記録と米軍資料を関連づけ、かつ裏付ける新資料の発見とその結論について紹介する。

#### (1) 戦中・戦後の記録

静岡空襲については、昭和20年7月3日調査の「静岡県ノ戦災概況ト其ノ処理等ニ関スル書類<sup>28)</sup>」という資料があり、6月20日の静岡県地区の警戒警報発令23時36分、空襲警報発令0時54分とし、次のように記している。「B29約百四十機ハ〇〇・五〇頃ヨリ浜名湖ヲ東南進セル敵機情報アルヤ、間モナク駿河湾方面ヨリ一機低空ニテ侵入セル爆音聴取ノ間モアラズ、第一弾ヲ市西南部ニ投弾シ、爾後一機乃至四機ハ殆ンド連続的ニ市内ニ侵入シ、午前三時四十分ニ至ル間、旧静岡市内ニ濃密爆撃ヲ敢行」した。

静岡空襲を反映していると思われる『豊西村空襲記録』は、19日23時13分警戒警報発令、0時15分警戒警報解除とし「潮岬ヨリ日本海方面へ十三目標侵入機雷投下セリ、ツルガ附近海上ナリ」とコメント

28) 静岡県 (1993)『静岡県史 資料編20近現代五』973頁。



第2図：6月20日静岡空襲の際の爆撃行程

出所：作戦任務報告書 No.210～212。

している。この部隊が敦賀に向かった部隊が新潟に向かった部隊かは不明であるが、この日はまず機雷投下部隊に対する警戒警報が発令された。そして、次に警戒警報が発令されたのは23時30分、空襲警報は23時48分であった。この日、静岡に向かった第314航空団の137機であった。コメントについては豊橋空襲のところで引用したので、省略するが、空襲警報解除は20日3時33分、警戒警報解除は3時40分であった。

戦後出版された「静岡市の空襲」(『日本の空襲-四』)や『静岡市空襲の記録』は、「爆撃開始は二〇日零時五〇分以後ということになるが、空襲警報発令時点で市内はすでに火の海と化しており、この報告をにわかに信ずることはできない<sup>29)</sup>」としており、当時の公的な記録と市民の記憶とはかなり開きがあったと言える。

## (2) 米軍資料

作戦任務報告書210～212によれば、静岡は、豊

橋、福岡と並んで第2回中小都市空襲の目標となった。静岡に向かった部隊は、第314航空団の137機(先導機12機、本隊125機)が日本時間で19日18時20分～19時19分(1時間59分)にマリアナ基地(グアム島)を出撃した(第2表参照)。これらの部隊が搭載した焼夷弾は、500ポンド集束焼夷弾 E46, 2,950発(590.0トン)、100ポンド焼夷弾 M47A2, 11,563発(398.7トン)などであった。

137機は、3時間35分後の19時13分～21時3分(1時間50分)に硫黄島を通過、さらに神津島に向い、同島を出撃始点(departure point)とし、0時44分～2時47分(2時間3分)に伊豆半島の波勝崎をIPとして駿河湾を北西に進んだ(第1図参照)。IPから目標上空までの47kmを7分で静岡上空に到達し、目標上空時間は0時51分～2時54分であった(第1表)。

出撃した137機のうち第1目標に焼夷弾を投下したのは123機、投下した焼夷弾はE46, 2,494発(498.8トン)、M47A2, 10,717発(369.5トン)であった。この結果、2.25平方マイル(約5.83平方km)が焼失した。これは市の総面積の66%に上った<sup>30)</sup>。

第314航空団の基地であるグアム島から伊豆半島の波勝までの距離は2,440kmであるが、この距離を6時間24分で航行した。時速は約381kmであった。IPから目標まではすでに見たように7分であるので、時速約391kmで進んだ(第1表および第2表)。これはすでに見た他の作戦にほぼ準じていると考えられる。

## (3) 新資料の発見とその結論

静岡空襲については、既述のように「多くの人々は日が変わる前に空襲が始まったと記憶しており、長い間・・・6月19日とされてきた」。しかし、当時の日本側資料においては6月20日、「〇〇時五〇分頃ヨリ浜名湖ヲ東南進セル敵機情報アルヤ」間もなく爆撃が開始されたとしているだけでなく、米軍資料によれば、爆撃が開始されたのは既述のように

29) 引用は、松浦総三・早乙女勝元・今井清一企画・日本の空襲編纂委員会編集(1984)『日本の空襲-四 神奈川・静岡・新潟・長野・山梨』(三省堂)224頁。静岡空襲を記録する会(1974)『静岡空襲の記録』443頁もほぼ同様の内容である。

30) 「作戦任務報告書 No.210～212」。

第3表：豊橋空襲に関連する報道

	警戒警報	空襲警報	上陸（またはIP 通過）時刻	爆撃開始	備考
朝日新聞			20日 0時40分		
鉄道省			20日 0時40分		
豊田珍彦（豊橋）	19日23時40分	20日 0時00分			警報解除 5時頃
三重の空襲時刻表	19日23時42分	19日23時57分			空襲解除 3時26分
豊西村空襲記録	19日23時33分	19日23時40分			空襲解除 3時33分
米軍資料			20日 0時40分	20日 0時58分	
(参考)					
静岡市	19日23時36分	20日 0時54分		20日 0時54分	空襲解除 3時40分
藤枝防空哨				20日 0時51分	
米軍資料			20日 0時44分	20日 0時51分	

出所：既出の各資料より作成。

6月20日0時51分である。こうしたなか、元監視哨員から藤枝市博物館に寄贈された『藤枝防空監視哨資料』および元監視哨員の家族から静岡市の平和資料館を作る会に寄贈された『蒲原防空監視哨資料』により、静岡空襲の爆撃開始時間についての認識は大きく変わった。

例えば、『藤枝防空監視哨資料』の藤枝監視哨「警報指揮連絡法控（敵機侵入状況）」（自昭和二十年四月四日至昭和二十年七月十日）には、以下のような記録がある<sup>31)</sup>。

「二十三時五十八分南ヨリ北東 敵大型爆音 高度五千米直二十軒 二十四時二分東去ル」

「零時四十九分南東ヨリ北東 敵大型爆音 高度五千米直十五軒 五十分北東二去ル」

「零時五十一分北東ヨリ南西 敵大型爆音 高度五千米直五軒 □分南去ル」

同資料は、以後、ほぼ1分間隔で北東から南西へ爆音を聴取しており、最後の聴取は2時55分となっている。

監視哨資料から、新妻博子（2011）「米軍資料と防空監視哨資料の照合から」（『空襲通信』第13号）は、次のようにまとめている<sup>32)</sup>。「23時58分の1機は風程観測機と思われる。蒲原では波勝崎より静岡へ向かうB-29を0時52分より、藤枝では静岡から御前崎方面へ向かうB-29を0時51分より1機ずつ

補足」。米軍資料の焼夷弾投下開始時間の0時51分と概ね矛盾しない（33頁）。

こうして、「静岡空襲は近年まで6月19日に始まったとされてきたが、・・・両監視哨の記録は作戦任務報告書の記述と同様、6月20日であることを支持しており、長年の懸案に終止符を打つことができた」（同上）としている。

#### 4. まとめ

##### （1）時間的視点から

これまで、述べてきたことを整理してみたい。まず、豊橋空襲に関連する警報関連情報を表にまとめると第3表ようになる。警戒警報を見るといずれの日本側の記録においても19日23時43分前後に集中している。そして、参考にある静岡を除くと警戒警報後間もなく空襲警報が発令されているようである。こうした23時台の警戒および空襲警報は、この日行われた機雷投下作戦（作戦任務213）に対するものだったと考えられる。

おそらく、機雷投下作戦と入れ替わりに豊橋市街地や静岡市街地の焼夷空襲を目的とした第58航空団や第314航空団が志摩半島および伊豆半島から来襲したために、これらの部隊に対する警報発令が十分に機能しなかったものと考えられる。そして、こうした事態が市民の記憶を混乱させたものと推察され

31) 藤枝市博物館所蔵。同資料については村瀬邦彦（2010）「藤枝防空監視哨資料による警戒警報・空襲警報発令解除一覧」『藤枝市研究』第11号参照。

32) 両監視哨に基づく最初の成果は、静岡平和資料館をつくる会（2005）『静岡・清水空襲の記録』に紹介されている。なお、新妻氏からは静岡空襲に関する資料および助言をいただいた。



る。

第58航空団についてみると、米軍資料が志摩半島上陸時刻を20日0時40分としており、これは、『朝日新聞』1945年6月21日付)の「東海軍管区司令部発表(昭和二十年六月二十日十二時)マリアナ基地の敵B29約二百機の中約九十機は本六月二十日零時四十分より逐次志摩半島に侵入し渥美湾北部を経て豊橋市付近に焼夷攻撃を行ひたるのち、概ね三時すぎ頃までに浜松附近より南方に脱去」という記事と符合する。この記事を素直に読めば、20日0時40分に「志摩半島に侵入し」、爆撃はその後ということになる。

すでに第1表で見たように、東海地域の近隣市の爆撃開始時刻は、1時前後に集中しており、静岡市の場合には、米軍資料によれば爆撃開始時刻は、0時51分であるが、同市で空襲警報が発令されたのは爆撃開始後の0時54分とされており、空襲は、警報とほぼ同時に開始されたとされる。一方で、その時点では市街地は火に包まれていたという証言もあるが、藤枝防空監視哨資料は米軍資料を客観的に裏付ける結果となったことは、既に述べた通りである。

米軍資料(「作戦任務報告書」)によれば、グアム島を出撃して硫黄島を経由して志摩半島に上陸する間の先頭機から最後尾のB-29が通過する時間は2時間17分であり、豊橋空襲の部隊の先頭機による爆撃開始から最後尾機の爆撃終了までの時間は、0時58分から3時17分まで、2時間19分である。部隊は編隊を組まずに1機ずつ飛行しており、2時間19分に136機が豊橋市街地に焼夷弾を投下したとすると、約1分間隔で通過したことになり、静岡空襲の場合の藤枝防空監視哨資料の記録とほぼ一致する。

『豊橋市戦災復興誌』によって爆撃開始時刻を23時43分として3時15分に終了したとすると、豊橋上空に3時間32分間にわたってB-29が通過し続けたことになるが、米軍資料の帰還時刻は、先頭機が20日7時19分、最後尾機が20日9時51分である。部隊が着陸に要した時間は2時間32分であり、所要時間はそれほど無理のないものと考えられる。

さらに、既に見たように米軍資料によれば、豊橋空襲の部隊の出撃から帰還までの時間は約13時間であり、目標上空までは6時間42分である。この時間

第4表：6月19日(マリアナ時間)に出撃した気象観測爆撃機および写真偵察機等

任務	目標	備考
WSM 313-202	呉-高知	気象データの取得
WSM 73-203	浜松	気象データの取得とT-3リーフレット爆弾の投下
WSM 314-204	濟州島	気象データの取得
RSPM 315-6	横須賀	レーダースコープ写真の撮影
RSPM 315-7	名古屋	レーダースコープ写真の撮影
3PRM 263	北海道	機械故障のため中止
PRM 314-1	鹿児島	2機による写真撮影および爆撃

出所：「作戦要約」より作成。

を念頭において23時43分に豊橋上空に到着するためには往路を1時間15分短縮しなければならないが、このためには、往路を5時間27分で航行しなければならない。さらにこのためには、B-29は時速約430km以上のスピードが求められる。復路に要する時間もふくめて、他の作戦と比較してもかなり不自然である。

以上から爆撃開始時刻23時43分説にはかなり無理があると結論づけることができる。

## (2) 他の作戦の可能性

もし、23時43分に豊橋を空襲したのが第58航空団でないとしたら、その時間に豊橋を爆撃できる作戦はどのようなものがあつたであろうか。先に見た機雷投下部隊については、警報の対象になったようであるが、搭載爆弾が機雷であるだけでなく、これらの部隊は100%目標に機雷を投下しており除外することができる。

その他の可能性としては、これまで日誌の紹介の中でも連日、日本に來襲していた気象観測爆撃機、写真偵察機、レーダースコープ撮影機などである。19日から20日にかけてのそれらの動向はどうだったのであろうか。

米軍資料(「作戦要約」)によれば、マリアナ時間の6月19日に日本に向けて出撃した気象観測爆撃機(WSM)、写真偵察機(PRM)およびレーダースコープ写真撮影機(RSPM)は、第4表の通りである。この時期には、出撃時刻、帰還時刻とも記載がない

ため、日本に來襲した時刻を推定することは不可能であるが、日本時間で19日から20日にかけて來襲したものと推定される。しかも、これらの任務機は、一部を除けばいずれも爆弾を搭載することはあっても、一般目的弾（GP）が多く、数量も少ないため街を火の海にするような能力は欠いていると言える。

### （3）現状での結論

これまで見てきたように、第58航空団だけでなく、その他の部隊が23時43分に爆撃できた可能性は低いということができよう。逆に米軍資料が示す0時58分に最初の焼夷弾が投下された可能性が高いという結果となった。とはいえ、それを証拠づける豊橋周辺地域の記録は見つけることができなかった。渥美半島にも防空監視哨があったとされるが、藤枝や蒲原のような詳細な記録は残っていないようである。しかし、静岡市の事例の他にも各地の測候所の記録から爆撃開始時刻が判明した事例もある。今後、新たな資料の発掘（日本側資料および米軍資料）も含めてさらに検討を進めていくことが必要であろう。

### <主な参考文献>

1. Headquarter of XXI Bomber Command, 20th Air Force, Tactical Mission Report (同資料については工藤洋三企画・制作 [2009], XXI Bomber Command & 20 Air Force Tactical Mission Reports Mission No.26 to No.331を利用した)。本稿では「作戦任務報告書」の日本語訳を当てている。
2. Headquarter of XXI Bomber Command, 20th Air Force, Narrative History, Documents 196-198, Operational Summary (同資料はピースおおさかがアメリカのマックスウェル空軍基地の合衆国空軍歴史研究センターから収集した資料である。本稿では「作戦要約」の日本語訳を当てている。
3. Damage assessment photo intelligence reports of Far Eastern targets filed by area and contain all available information on the area : Hamamatsu Report (同資料は米軍が区分した「Hamamatsu Area」について第3写真偵察隊の報告書)
4. Mark Lardas (2019), Japan1944-45 : LeMay's B-29 strategic bombing campaign, Blooms-bury Publishing
5. 小山仁示訳 (1995) 『米軍資料 日本空襲の全容—マリアナ基地 B29部隊』 東方出版
6. 工藤洋三 (2015) 『日本の都市を焼き尽くせ！—都市空襲はどう計画され、どう実行されか—』 (自主出版)
7. 工藤洋三 (2018) 『アメリカ海軍艦載機の日本空襲—1945年2月の東京空襲から連合軍捕虜の解放まで』 (自主出版)
8. 奥住喜重 (2006) 『B-29 64都市を焼く 1944年11月より1945年8月15日まで』 挿籃社
9. 奥住喜重・早乙女勝元 (2007) 『東京を爆撃せよ 米軍作戦任務報告書は語る』 三省堂
10. 原田良次 (1973) 『日本大空襲』 (上・下) 中公新書
11. 阿部聖 (2006) 『米軍資料から見た浜松空襲』 愛知大学総合郷土研究所ブックレット12
12. 岩淵彰利 (2020) 『令和に語り継ぐ豊橋空襲』 人間社
13. 東京空襲を記録する会 (1975) 『東京大空襲・戦災史第3巻』 講談社
14. 松浦総三・早乙女勝元・今井清一企画・日本の空襲編纂委員会編集 (1984) 『日本の空襲—四 神奈川・静岡・新潟・長野・山梨』 三省堂
15. 名古屋空襲を記録する会 (1985) 『名古屋空襲誌・資料篇』
16. 浜松空襲・戦災を記録する会編 (1973) 『浜松大空襲』
17. 津の空襲を記録する会 (1986) 『三重の空襲時刻表 1942.4.18~1945.8.15』
18. 静岡空襲を記録する会 (1974) 『静岡空襲の記録』
19. 静岡平和資料館をつくる会 (2005) 『静岡・清水空襲の記録』
20. 国鉄の空襲被害記録刊行会 (1976) 『国鉄の空襲被害記録』 集文社
21. 豊橋市戦災復興誌編纂委員会 (1958) 『豊橋市戦災復興誌』
22. 田原市 (1978) 『田原市史 通史編 (下巻)』
23. 豊川市 (2007) 『新編豊川市史 通史編第3巻近代』
24. 静岡県 (1993) 『静岡県史 資料編20近現代5』
25. 藤枝監視哨「警報指揮連絡法控 (敵機侵入状況)」 (自昭和二十年四月四日至昭和二十年七月十日) 藤枝博物館所蔵『藤枝防空監視哨資料』
26. 中山伊佐男 (2003) 『『空襲損害評価報告書』に見る豊

橋空襲」『空襲通信』第5号

27. 新妻博子 (2011) 「米軍資料と防空監視哨資料の照合から」『空襲通信』第13号
28. 村瀬邦彦 (2010) 「藤枝防空監視哨資料による警戒警報・空襲警報発令解除一覧」『藤枝市研究』第11号
29. 阿部聖 (2008) 「1945年4月30日と5月19日の浜松空襲」『空襲通信』第10号
30. 阿部聖 (2015) 「豊田珍彦『豊橋地方空襲日誌』を読む(4)」『地域政策学ジャーナル』第5巻第1号
31. 阿部聖 (2019) 「豊田珍彦『豊橋地方空襲日誌』を読む(7)」『地域政策学ジャーナル』第8巻第1号第2号合併号
32. 阿部聖 (2020) 「豊田珍彦『豊橋地方空襲日誌』を読む(8)」『地域政策学ジャーナル』第9巻第1号
33. 阿部聖 (2021) 「豊田珍彦『豊橋地方空襲日誌』を読む(9)」『地域政策学ジャーナル』第10巻第1号
34. 『朝日新聞』1945年5月, 6月分
35. 総務省 HP ([https://www.soumu.go.jp/main\\_sosiki/daijinkanbou/sensai/situation/state/tokai\\_07.html](https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/daijinkanbou/sensai/situation/state/tokai_07.html))